八女市文化財調査報告書 第3集

第3集

福岡県八女市

中尾谷窯跡群

—八女古窯跡群調査報告 Ⅱ—

1970

八女市教育委員会

序

八女市忠見地区の古代遺跡緊急発掘調査は県営開拓パイロット事業に関連し、43年度の「塚ノ谷窯跡群」調査に引続き、44年度は「中尾谷窯跡群」について調査をすすめました。

調査は県の補助を得て九州大学文学部考古学研究室及び土地所有者、パイロット事業の関係者のご指導とご協力を得て実施しましたが、充分な成果をあげることが出来ました。

ここに調査結果をまとめた報告書を刊行するはこびに至りましたが本書の執筆にあたっていただいた九州大学文学部考古学研究室のご熱意ご協力に深く感謝の意を表します。

昭和45年3月10日

八女市教育委員会

教育長　松　延　一　男

図　版　目　次

図版第一　中尾谷窯跡群遠景

——(上) 遺跡遠景　(下) 遺跡近景

図版第二　中尾谷窯跡第1号、第2号窯跡

——(上) 二段目　(下) 一段目

図版第三　中尾谷第1号窯跡

——(上) 二段目　(下) 一段目

図版第四　中尾谷第2号窯跡

(上) 三段目　(下) 一段目

図版第五　中尾谷第3号窯跡

挿　図　目　次

第 1 図　遺跡の位置（国土地理院二万五千分之一「八女」分載）……1

第 2 図　第3号窯跡発掘調査状況（小田撮影）……2

第 3 図　中尾谷窯跡群附近地形図（小田作成）……4

第 4 図　中尾谷窯跡群分布図（小田・黒野・真野実測、小田製図）……4～5

第 5 図　中尾谷第1号窯跡実測図（小田・黒野・真野実測、小田製図）……5

第 6 図　中尾谷第1号窯内出土須恵器実測図（小田測図）……7

第 7 図　中尾谷第1号窯内出土須恵器甕拓影 (1)（小田作成）……8

第 8 図　中尾谷第1号窯内出土須恵器甕拓影 (2)（小田作成）……9

第 9 図　中尾谷第2号窯跡実測図（小田・黒野・真野実測、小田製図）……10～11

第 10 図　中尾谷第2号窯内出土須恵器実測図 (1)（真野測図）……11

第 11 図　中尾谷第2号窯内出土須恵器実測図 (2)（真野測図）……13

第 12 図　中尾谷第2号窯内出土須恵器実測図及び拓影 (3)（真野測図）……14

第 13 図　中尾谷第2号窯内出土須恵器甕拓影（真野作成）……15

第 14 図　中尾谷第1号及び第2号灰原出土須恵器実測図（小田測図）……18

第 15 図　中尾谷第1号及び第2号灰原出土須恵器甕拓影（小田作成）……19

第 16 図　中尾谷第3号窯跡実測図（小田・真野実測、真野製図）……20～21

第 17 図　中尾谷第3号窯内及び灰原出土須恵器実測図（真野測図）……22
第 18 図　中尾谷第4窯灰原出土須恵器実測図（小田測図）……24
第 19 図　中尾谷窯跡出土第Ⅲ期須恵器細部対照図（小田作成）……27
第 20 図　岩戸山古墳出土土器実測図（小田、真野実測、真野製図）……30
第 21 図　岩戸山古墳出土土器実測図（小田実測、真野製図）……31
第 22 図　善蔵塚古墳出土須恵器実測図（小田・松本・藤口実測、真野製図）……32
第 23 図　立山古墳群出土土器実測図（小田、真野実測、真野製図）……33
第 24 図　平原（弘法谷）・日当山古墳群出土須恵器実測図 (1)
（石松好雄・松本　肇・藤口健二・真野実測、真野製図）……35
第 25 図　平原（弘法谷）・日当山古墳群出土須恵器実測図 (2)
（小田・松本・藤口、真野実測、真野製図）……36
第 26 図　三助山西地区遺跡調査風景（小田撮影）……38
第 27 図　三助山西地区炉跡実測図（小田測図）……39
第 28 図　三助山遺跡炉内及び炉跡南方出土遺物実測図（黒野測図）……40
第 29 図　塚ノ谷第3号窯灰原出土須恵器実測図（真野測図）……41

例　　言

1、本書は昭和44年度に八女市教育委員会主催によって緊急調査を行なった中尾谷窯跡群の調査報告書である。

2、本書の執筆分担は次のとおりである。

第1章、第2章、第3章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅴ、第4章Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ、付Ⅰ…小田富士雄

第3章Ⅰ、付Ⅰ……黒野　肇

第3章Ⅱ・Ⅳ、第4章Ⅲ、付Ⅱ……真野　和夫

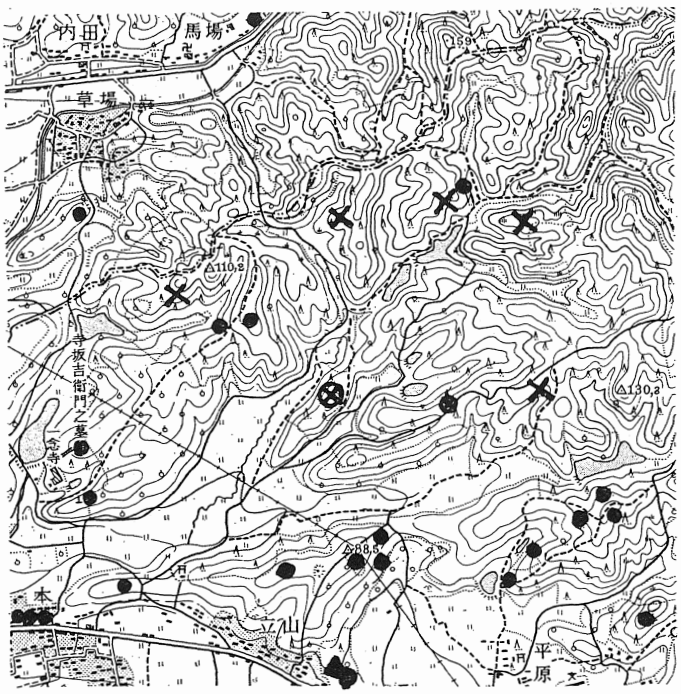
3、本書の図版写真は小田が撮影し、挿図の作成は小田、真野調査員が分担した。

4、本書の編集は小田が行った。

5、本書中に、前回調査の塚ノ谷窯跡群報告書を引用する場合、「調査報告Ⅰ」と略称している。

第１章　調　査　の　経　過

八女市忠見区における県営パイロット事業による開発工事はいよいよ昭和44年度より着工されて、同年夏からブルトーザーが入り、中尾谷、中尾山、三助山地区の一帯が山容を変えている。この地域は前回の調査までに確認されている管ノ谷、三助山窯跡群を含む支山の南西裾部にあたり、八女平野を北東から望む位置にある。中尾山の整地中に発見された一窯跡は未調査のままに埋没して保存されたが、中尾谷には階段状に整地した断面に灰原があらわれて窯跡の存在が確認され、また須恵器片もかなり発見されて調査の対象として県、市教育委員会でとりあげられたのであった。この間、県教委文化課より宮小路賀宏、石山勲両氏の踏査があり、市教委江下淳主事との連絡のもとに調査への準備がすすめられた。さらに三助山西地区の工事がすすめられる段階になって、９月16日には市教委からの要請をうけて県教委より石山氏、九州大学より小田富士雄、真野和夫が現地を踏査し、二箇所に火にかかつた痕跡の場所を発見した。そこで工事者側にその附近の工事延長を交渉すると共に、地主の要望もあって早急に調査を行なう必要が生じたので、協議の結果９月23日より30日までの調査日程を組み緊急に調査を行なうこととなった。しかしながら折あしく九州大学は封鎖ストライキ中であったから、考古学研究室の前回調査員を招集することができず、少数の調査員と地元忠見区からの人夫をもって行なった。調査日程、遺跡、調査員は次のとおりである。



第１図　遺　跡　の　位　置（国土地理院二万五千分之一「八女」分載）

⊗印　右・三助山西地区遺跡　左・中尾谷窯跡群

×　窯跡　　●　古墳

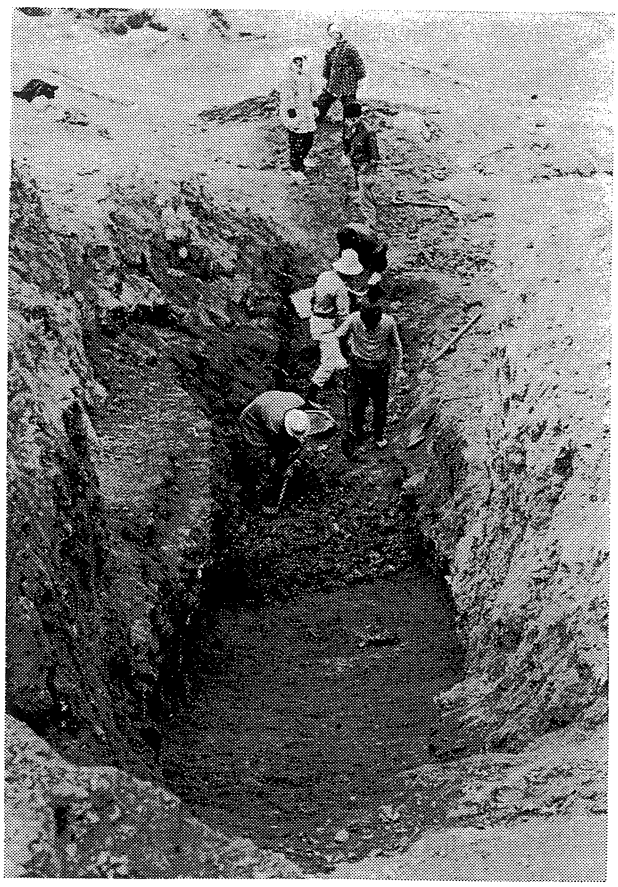
調査日程	昭和44年9月23日～30日	
調査遺跡	八女市忠見区山助山西地区	
	〃　中尾谷	
調査員	九州大学文学部助手	小田富士雄
	〃　学生	真野和夫
	〃　聴講生	黒野肇
八女市教育委員会	社会教育課長	平島忠太郎
	社会教育主事	江下淳
	〃	松延繁太
	中央公民館主事	渡辺勲
		牛島利郎

中尾谷遺跡では新しく二基の窯跡を発見し、これを発掘したが、調査以前より確認されていたものは、すでに工事が終了しているために旧地表にさらに約4 *m*の土砂をかぶせていて、人力では如何ともしがたいところから調査中の後半に八女市の教楽木建設に依頼して小型ブルトーザーで埋土の除去を行なった。しかしこの期間中にはこの窯跡（中尾谷第3号窯）の発掘はできないので、次回調査を企画することとして終了したのであった。

第3号窯跡の発掘は改めて11月6日から9日まで行い、調査員には小田、真野の両名があたった。

前後二回の調査を通じて市教委の方々は交代で朝夕の車での運搬にあたり、食事の御世話には中央公民館の山口房子氏、管理人の星野明氏御夫妻、八女市青年団女子の方々があたられて、我々の調査に援助いただいた。あわせて感謝申しあげる次第である。

（小田富士雄）



第2図　第3号窯跡発掘調査状況

第2章　窯跡の立地

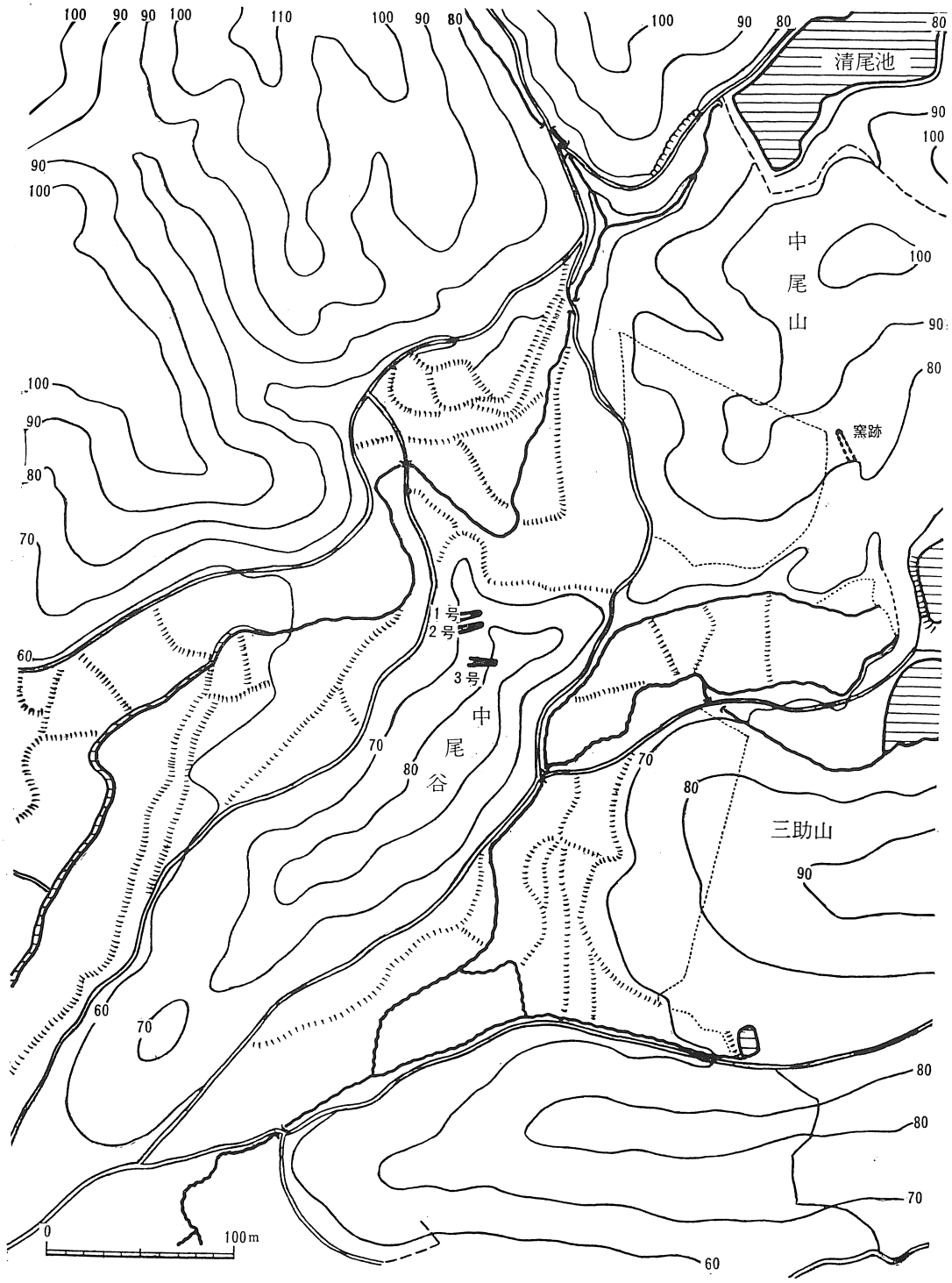
（図版第一、第3・5図）

遺跡は前回調査を行なった塚ノ谷窯跡群の南西700m余のところにある。八女市忠見区本部落の北西奥に「中尾谷」と称される狭長な山丘の西斜面を利用して窖窯を構築している。塚ノ谷窯跡群の裾にあたる清尾池に発する水路が窯跡の裾を流れ、また中尾谷の東を流れる水路と合して本部落に至る。中尾谷はこの両水路にはさまれた狭長な山丘で南西にのびている。海抜85mで、水田からの比高約20mである。窯跡は70mから83mのあいだに構築されている。窯跡のある斜面には八女平野をへだて南乃至南西方向から吹きあげる風が強く、今回の調査中にもその立地の妥当性を体験することができた。また清尾池から流出する水路以西の山地—塚ノ谷、牛焼谷窯を含む地域—は絹雲母片岩の岩盤が切通しに露出する古生代変成岩を基盤としているが、これより以東の地域—中尾山、中尾谷、三助山—では今回の調査前後にブルトーザーによって削平された過程を見ることができた結果では地表下ごく浅いところから第四紀洪積層に属する黄色の良質粘土があらわれ、この地域の基盤構成をなしている。したがって、前回調査の際に問題となった須恵器原料土の採取はこの地域で容易に果されることになる。

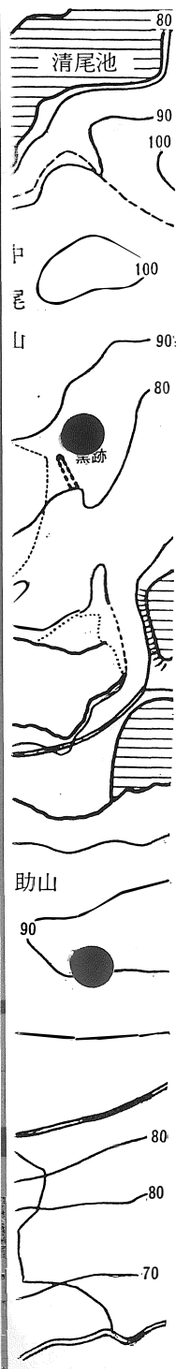
中尾谷遺跡の北東200mのところにあたる中尾山の東斜面は、調査以前に整地されている。未調査のままに埋もれているが、若干の採集資料によれば、中尾谷窯跡とほぼ同時期の須恵器を生産したものと思われる。

さらに三助山窯跡群の西方にのびる南斜面の整地によって、炉跡や、須恵器などが発見されたが、窯跡ではないようである。本書付篇に三助山西地区遺跡として登載しておいたので参照せられたい。この地区はその南に接してさらに山丘が東西にのびていて風向きを遮断しており、土質は中尾谷と類似しているが窯の構築には不適である。この地域は広範な整地作業にもかかわらず窯跡の存在は知られていない。かくして中尾谷窯跡は直接八女平野にのぞんだ最も近い窯跡ということになる。

（小田富士雄）



第 3 図　　中尾谷窯跡附近地形図（開拓以前の旧地形を示す）



第4図　中尾谷窯跡群分布図

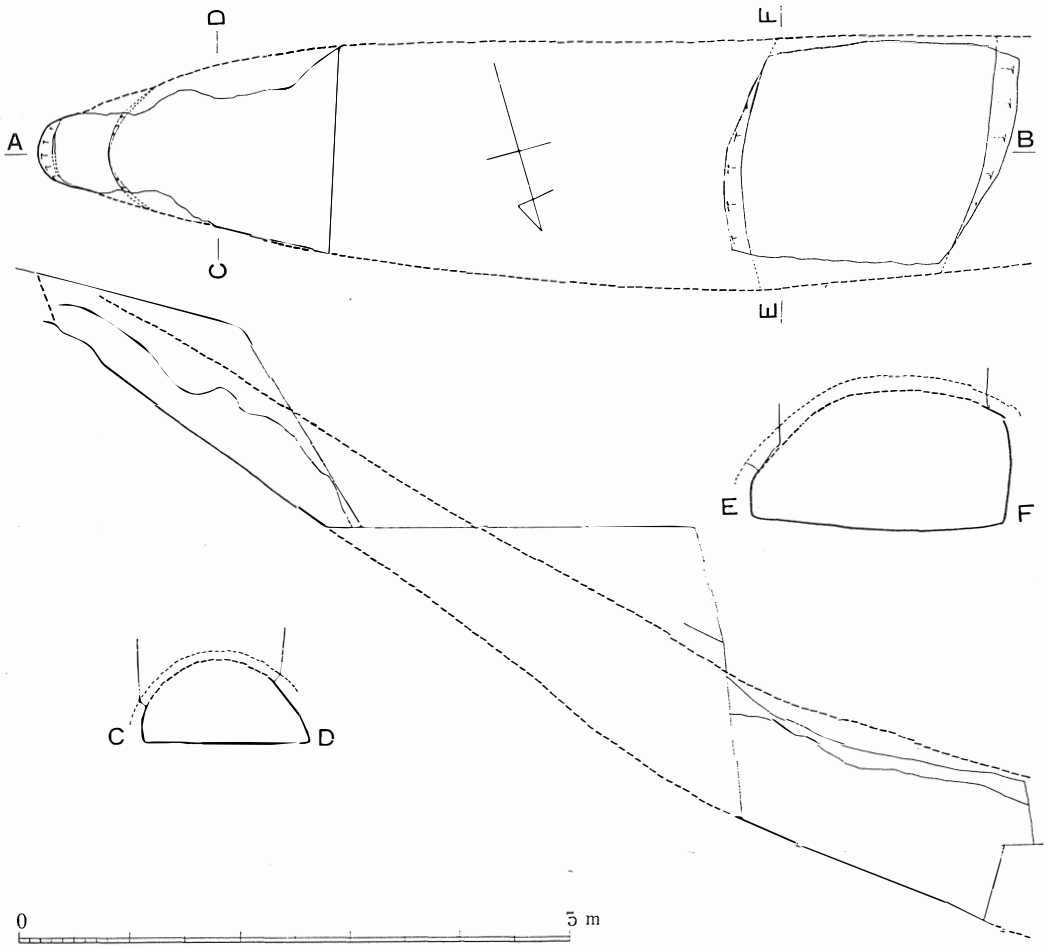
第3章 各窯跡の調査

I 第1号窯跡

果樹園にするため階段状に整地され、また丘の裾は新たに農道が作られているために窯全体を完掘することができなかった。従って下より数えて第1段目と第2段と第3段の間の整地面を発掘した。焼成部の中央と燃焼部、焚口部は発掘することができなかった。

(1) 窯 の 構 造 (図版第二・三、第5図)

窯の現長は9.1mを測り、地山を掘り下げて築造した無段登窯で天井部は煙道部に至るまで全部陥没していた。窯の中軸線は N76°E で床面の傾斜は燃焼部に近い所で22°、煙出し附近に於いては36°



第 5 図　中尾谷第 1 号窯跡実測図

を示している。

焼成部　焚口及び燃焼部は農道下になっているため発掘できなかったので本窯跡では焼成部が主となった。煙出しまでの窯体の長さは約9.1mを測り、窯幅は燃焼部に近い附近で2.26mであるが、上方にむかって徐々にせばまり煙出し部では0.7mとなる。燃焼部に近い附近では壁面が剝離し再三粘土を塗りかけて補修し使用している。床面は鼠色に固く焼け固まっていた。

煙出し　焼成部より傾斜を急に上方へあげて煙出しとしている。上部は破壊され完全な状態では残ってなかった。煙出し周辺の地山は焼けて赤褐色を呈していた。　（黒野　肇）

（2）窯内遺物の出土状態

窯内の製品はほとんど運び出されて廃窯状態であったと思われる。それでも窯底に近いあたりから坏、高坏、甕などの破片が発掘に際して採集されたので、窯跡の年代を知るには支障ない。窯底に当初の状態で据えられたような資料はまったくみられなかった。

（3）遺　　物（第6～8図）

坏の蓋（2）

径 15.4cm、高さ 4.5cm の大形で、口唇部内面に段を有する。外側に下から 2.5cm のところに一条の沈線を配している。

坏の身（3）

径 14.5cm、高さ 5cm、印籠蓋式になる蓋受けは高さ 1.2cm でやや内傾する。削り仕上げの底面に二条の篦描平行線記号がある。

高　坏（6）

脚端径 10.5cm、三個の透孔ある脚部がある。小形無蓋高坏であろう。内外面とも横撫で仕上げである。

甕（9）

朝顔形に開いた口頸部（口径 16cm）があり、器壁はやや厚手である。口唇上面は平坦な断面をもち、頸部には櫛描波状文がある。

坩の蓋（1）

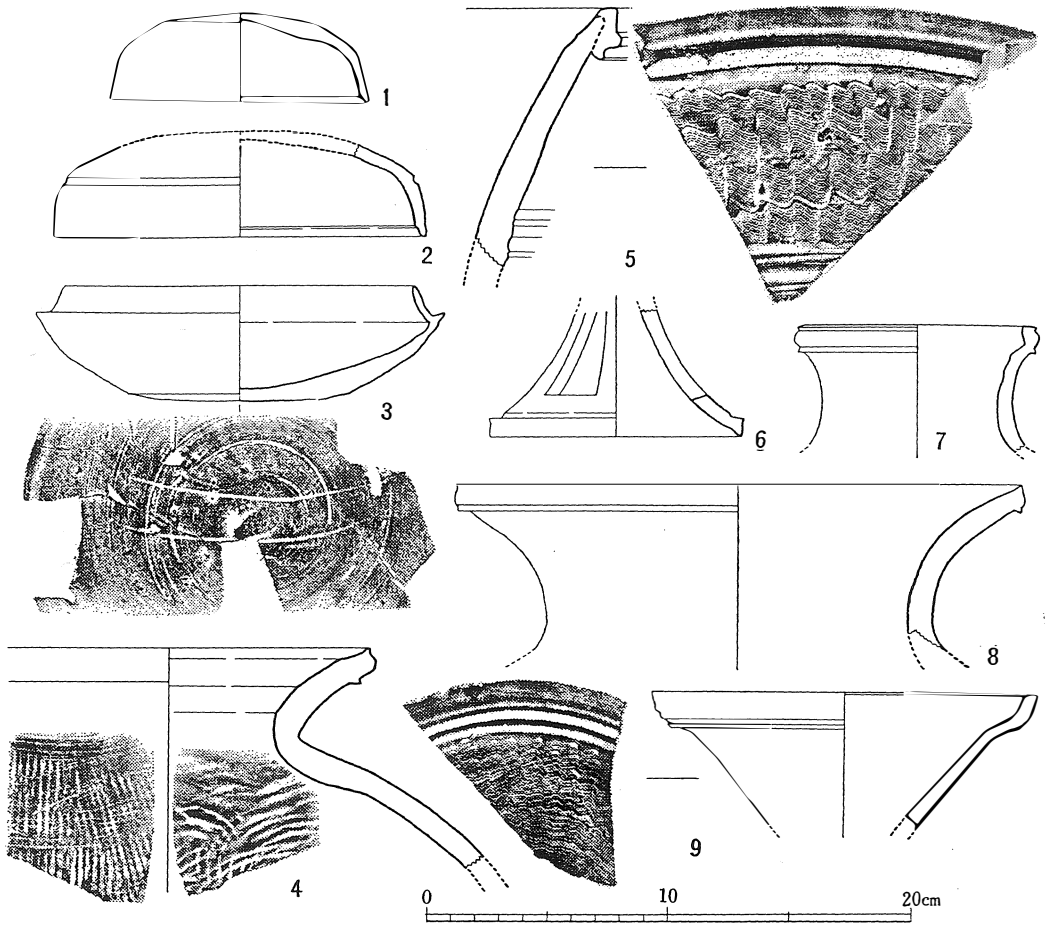
径 10.7cm、高さ 4cm で、頂上は削り仕上げである。口唇内面は斜めに削られて古式の断面を有する。

壺（4）

径 16.6cm、球形胴に短頸の口頸部がつき、急に外湾する形態をとっている。口縁外側に段を設けて頸部と区別している。胴部の外側は平行条線叩文を施し、かき目整形仕上げである。内面は青海波叩文が施されている。

提　瓶（7）

口径 9.8cm の大形品である。口唇上面が平坦になり、外側に肥厚して頸部との間に段を設けて区



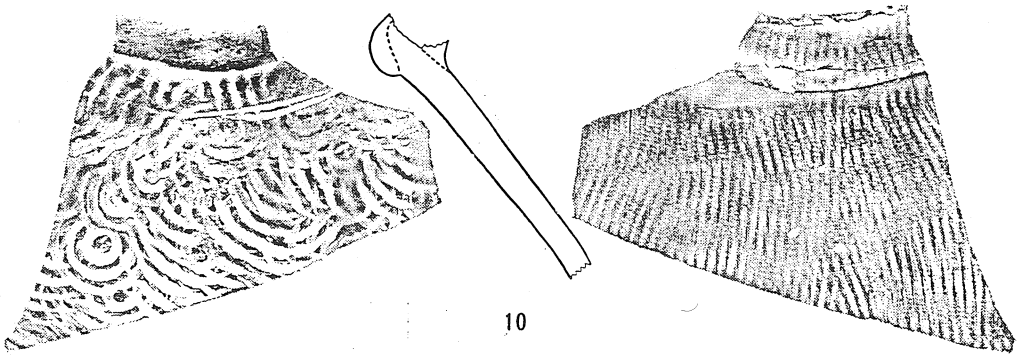
第 6 図　　中尾谷第１号窯内出土須恵器実測図

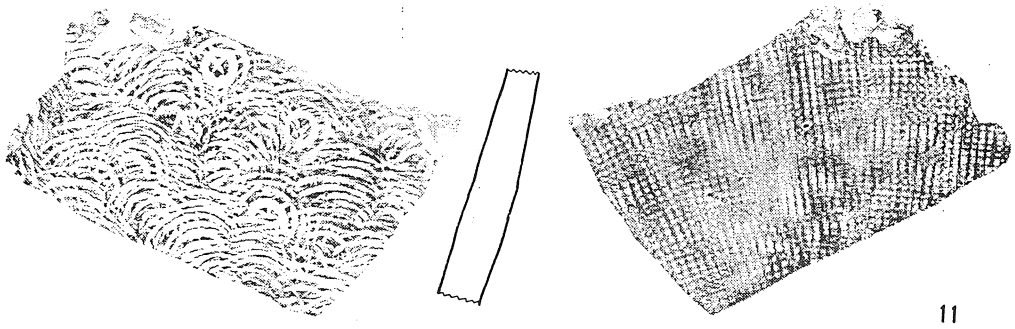
別している。

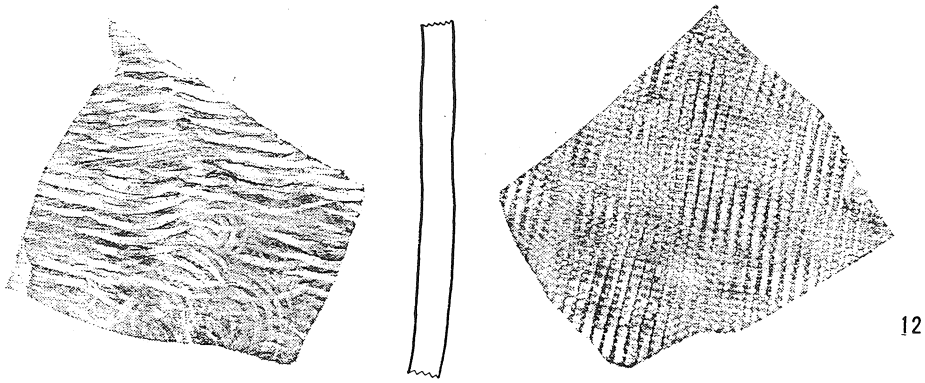
甕（5・8・10～18)

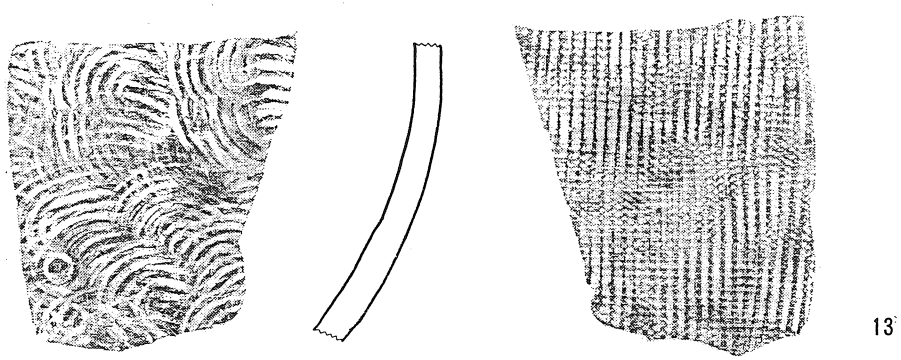
口頸部の形態に二種あり、一(8)は短頸で口径 23.4cm、ゆるやかに外湾する口頸部の形態をとる。他の一(5)は長頸で、口頸も 22cm の大形品である。口縁端の外側を肥厚させ、平行沈線文によって頸部を二区以上に分け、各区は櫛描波状文を重ねている。甕全体の形を復原することはできなかったが、球形を呈する胴部には外側に叩き板の征目に直文する平行線を入れたもので叩き、さらにかき目整形したもの(15)もみられる。内面には同心円文の叩きが施されているが、線の間隔も細くてやや古式の趣きあるもの (11・18) も含まれている。

（小田富士雄）

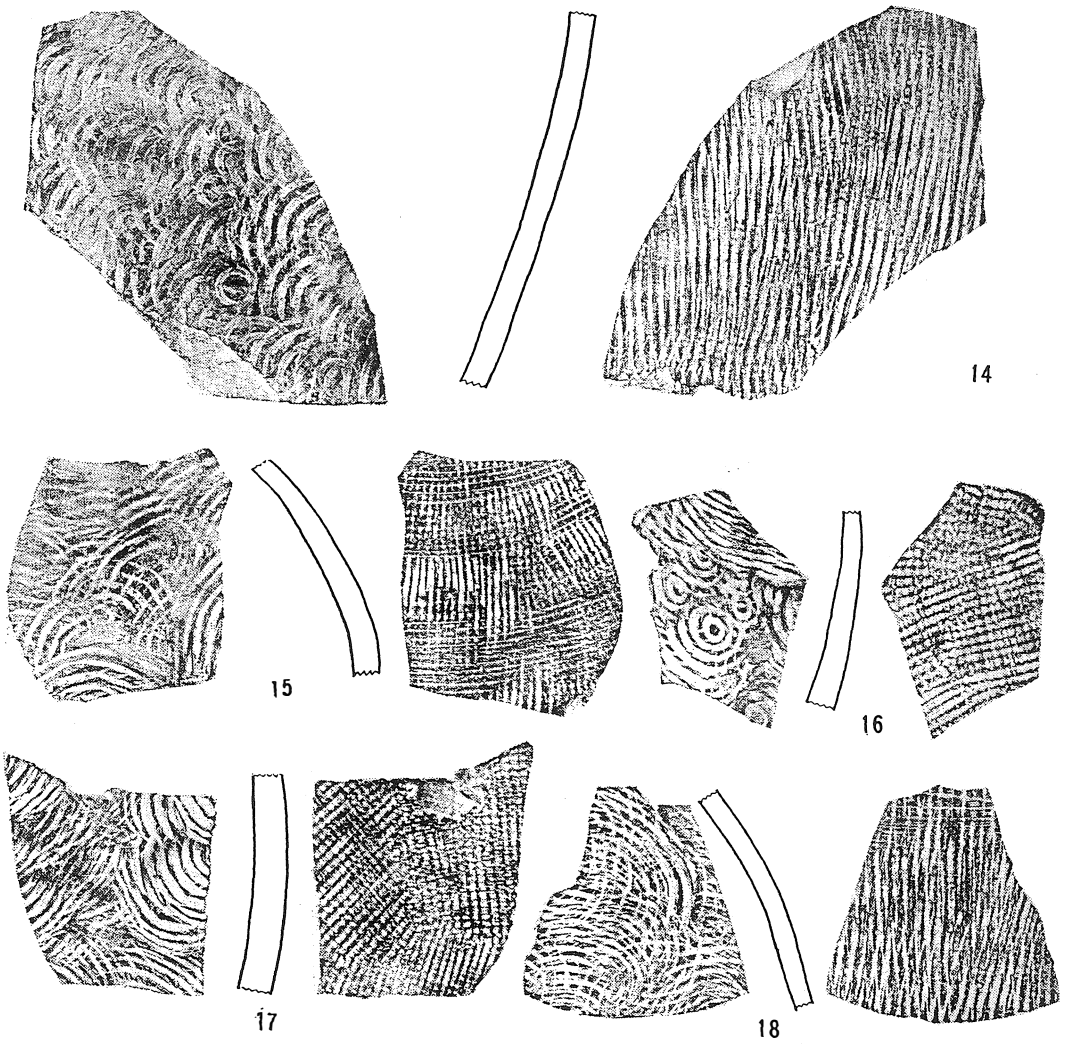








第 7 図　　中尾谷第１号窯内出土須恵器甕拓影 (1)



第 8 図　　中尾谷第１号窯内出土須恵器甕拓影 (2)

Ⅱ　第２号窯跡

（1）窯　の　構　造（図版第二・四・第９図）

第１号窯に隣接して、それよりやや高く構築されている。整地された丘陵の一段目、二段目、三段目をそれぞれ掘開して図上復原的な調査を試みた。一段目では窯幅が下方にせばまってゆく傾向がみられるので、燃焼部で焚口に近ずいていると思われるが、焚口は道路下にあると推定されている。窯の全長は発掘した三箇所をつないだ長さ12.7mであるから、13mくらいになるであろう。天井は陥没してしまっているが、くりぬき式の登り窯であり、窯体の主軸は N82°W を示している。床面の傾斜は通じて28°である。

燃焼部　一段目で発掘したところは、道路際で幅1.3m、二段目寄りで2.25mとなり、窯の奥にむかって次第に幅を増しているので、燃焼部とみることができる。床面、両壁ともによく焼き固まっており、還元焔をうけて鼠色を呈している。道路寄りの方では窯壁が垂直に近い立上りをみせていて焚口に近いことを示している。この二段目寄りの方はすでに焼成部にかかっていると思われる。両者の境は明瞭でない。

焼成部　二段目を主体として一段目及び三段目にかかっている。二段目では通じて窯幅 2.2m を示し、窯壁は内傾する。横断面は半球形をなしていたと思われ、推定復原高1.5mほどになるであろう。くりぬかれた壁面にはスサを混ぜた粘土を厚く塗って構築されていた様子をよくうかがうことができる。

煙出し　三段目中ほどに煙出しがあらわれた。二段目から窯幅が次第にせまくなってきて、三段目では1.6mとなり、末端では85cmで半円形プランを呈する。焼成部から特に注目するほどの変化も示さず、末端の半円形部でわずかに平坦な床面をつくりだしている。

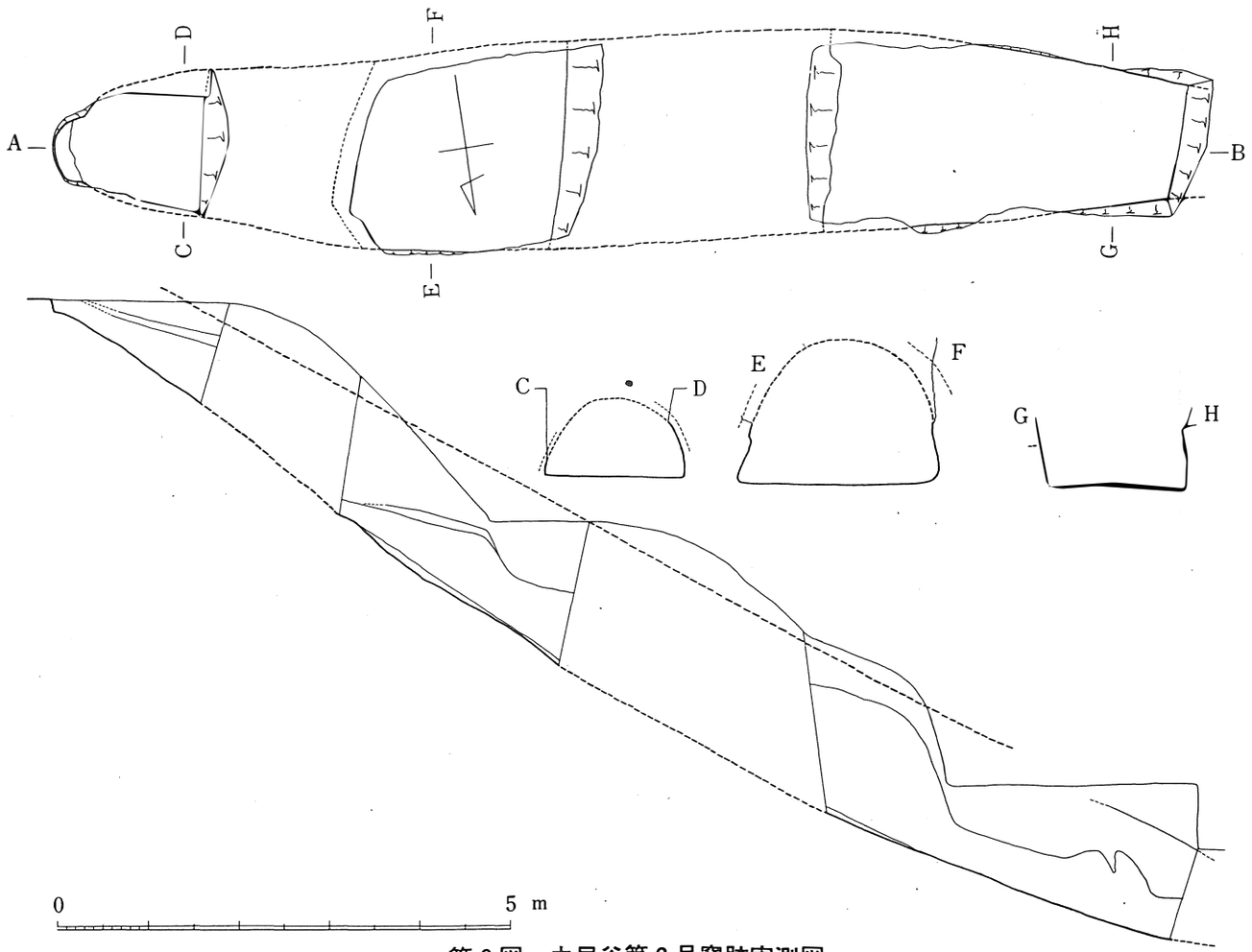
（2）窯内遺物の出土状態

二段目の焼成部からも二、三の須恵器破片が発見されているが、まとまったものはなく、大部分は一段目の燃焼部の床面近くから発見された。その出土状況からみて、焼成部から転落して集積したものと思われ、これから道路下になっている焚口にかけて発掘をすすめればまだかなりの遺品が得られるであろう。いずれにせよ窯内出土品は窯出しに際して廃棄された破片類である。　（小田富士雄）

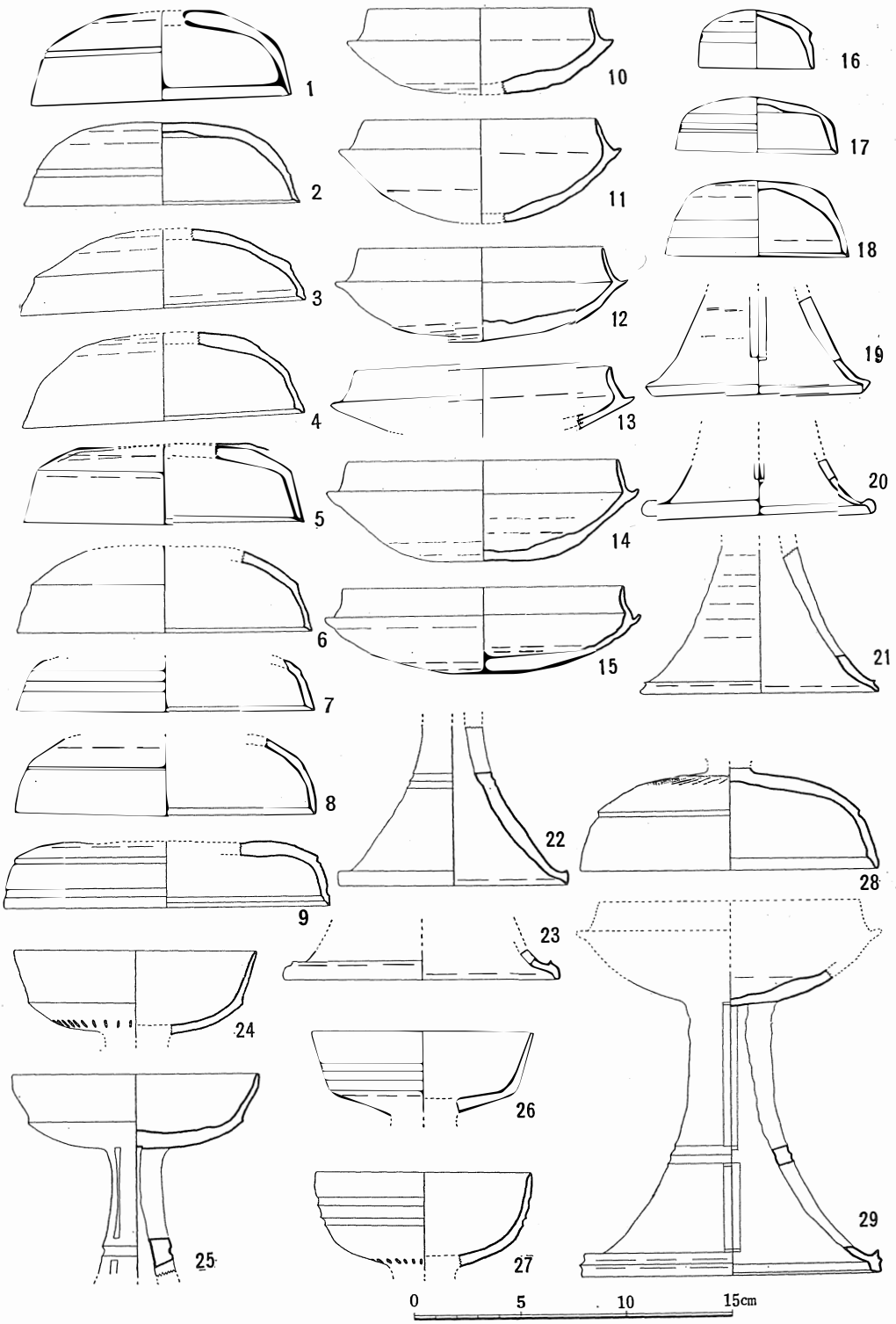
（3）遺　　物（第10～13図）

坏の蓋（１～９）

(a) 天井部と体部との境に段を有するもので（９）はもっとも典型的である。（３～６）は、この退化形態とみられる。口径 13.5～15cm、高さは 4cm前後のものが多い。すべて口唇部内面に段を有しており、体部のつくりが(b)に比べて直線的傾向をもつ。ヘラ削りの際に生じた砂粒の走行によると左回転が圧倒的である。体部外面にヘラ描記号をもつものもある。形式的には(b)に先行するものといえ



第9図　中尾谷第2号窯跡実測図



第 10 図　　中尾谷第 2 号窯内出土須恵器実測図 (1)

よう。

(b) 天井部と体部の境に一条の沈線を有するもの（1・2・8）で、口径 13～14cm である。口唇部内面には(a)と同様段を有するが、やや器高が増し器形に丸みを帯びる。(7)は、小片のため全体の形を知り得ないが肩部に2～3条の沈線をもっており扁平な形態を示している。

坏の身（10～15）

最大径（12.5～15cm）、高さ（3.7～5cm）などに若干の幅がみられる。いずれも蓋受けは高く（1.5cm前後）つくられるが、外彎気味に一気につくられたものと、やや内傾してつくられ途中でカーブをかえて直立するものとの二種類があり、後者の場合において器形が扁平となる傾向が多くみられる。

高　坏（19～29）

無蓋高坏の身では、比較的深いものと浅いものとがあり、形態的には、体部から底部への変換部に坏の蓋(a)に類似した段を設けたもの（24・25）と、体部に2～3条の沈線を配したもの（26・27）との二種類がある。量的には後者がやや多いようである。底部外面に刺突文によって装飾したものもある（24・27）。口径は 11cm 前後である。

有蓋高坏の身の出土はなかったが、(28)はその蓋とみられる。口径 14cm を測り撮みの部分を欠失している。天井部から体部へうつる境には段を有しており、坏の蓋(a)と同様の形態を示している。天井部の削り仕上げ部分にはカキメ整形が加えられた後、撮みを中心とした二重の刺突文がめぐらされて装飾となっている。(34)は非常に大形の蓋であるが、細部の手法において(28)と似通っており、口径 22.5cm を測る。ここでは天井部の刺突文は省略されている。

高坏の脚では多様に変化した脚端の形態をみることができるが、(22)の形態が基本的なものとみられ量的にもっとも多い。他の形態はこれから派生的に生じたと考えられる。(29)は径も大きく安定しており有蓋高坏の脚となるものであろう。透孔は上下3～4孔が普通で1孔のみのものもある。

𤭯（30～33）

いずれも口頸部のみの出土で、(33)は窯外での表採品である。口径は 11～15cm あり、口縁部で大きく屈曲させて径を拡大させた形態は特徴的である。(30)は口縁部における屈曲も小さく高坏の脚に非常に類似している。口唇部は丸くおさめるかあるいは平坦な断面となり、頸部には波状文をめぐらしている。

坩の蓋（16～18）

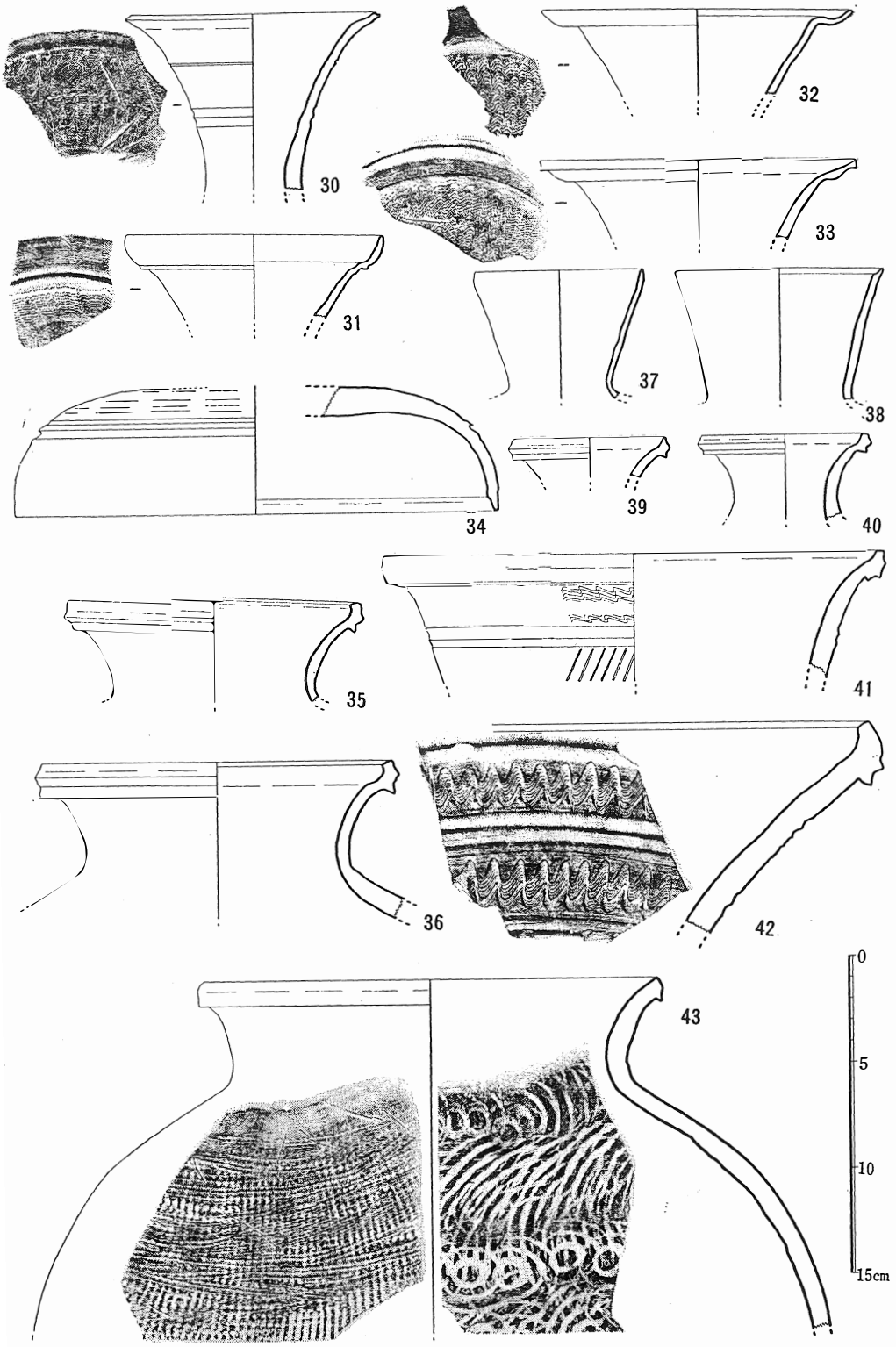
口径 5.5～8.5cm あり、もっとも小形の蓋では口唇を丸く仕上げているが他の二例では坏の蓋と同じく段を有するつくりとなっている。

壺（35）

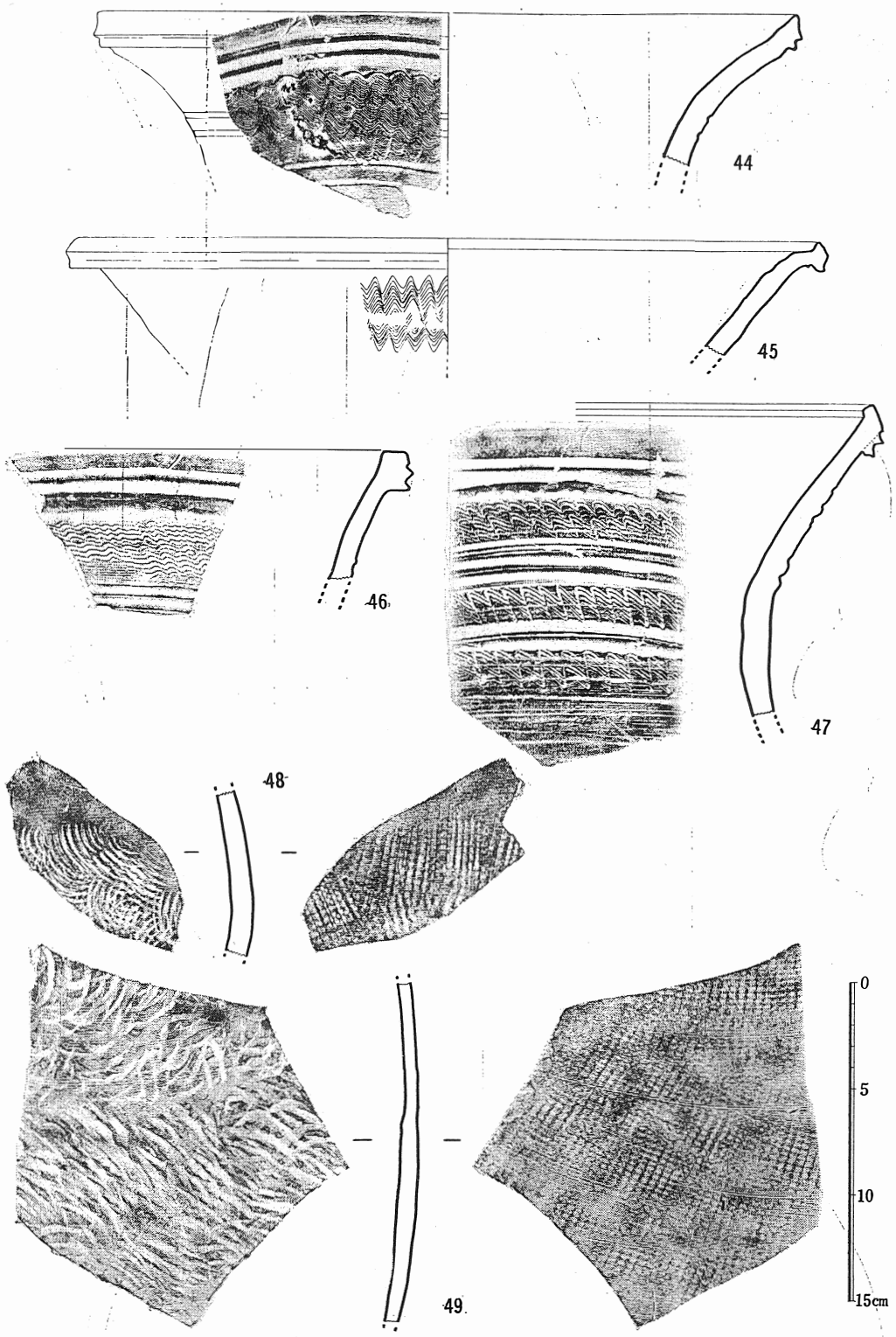
口径 14cm 前後あり、口縁部にはしっかりした凸帯を有し上面を平坦につくる手法は特徴的である。頸部に波状文の施されたものも1例出土している。

長頸壺（37・38）

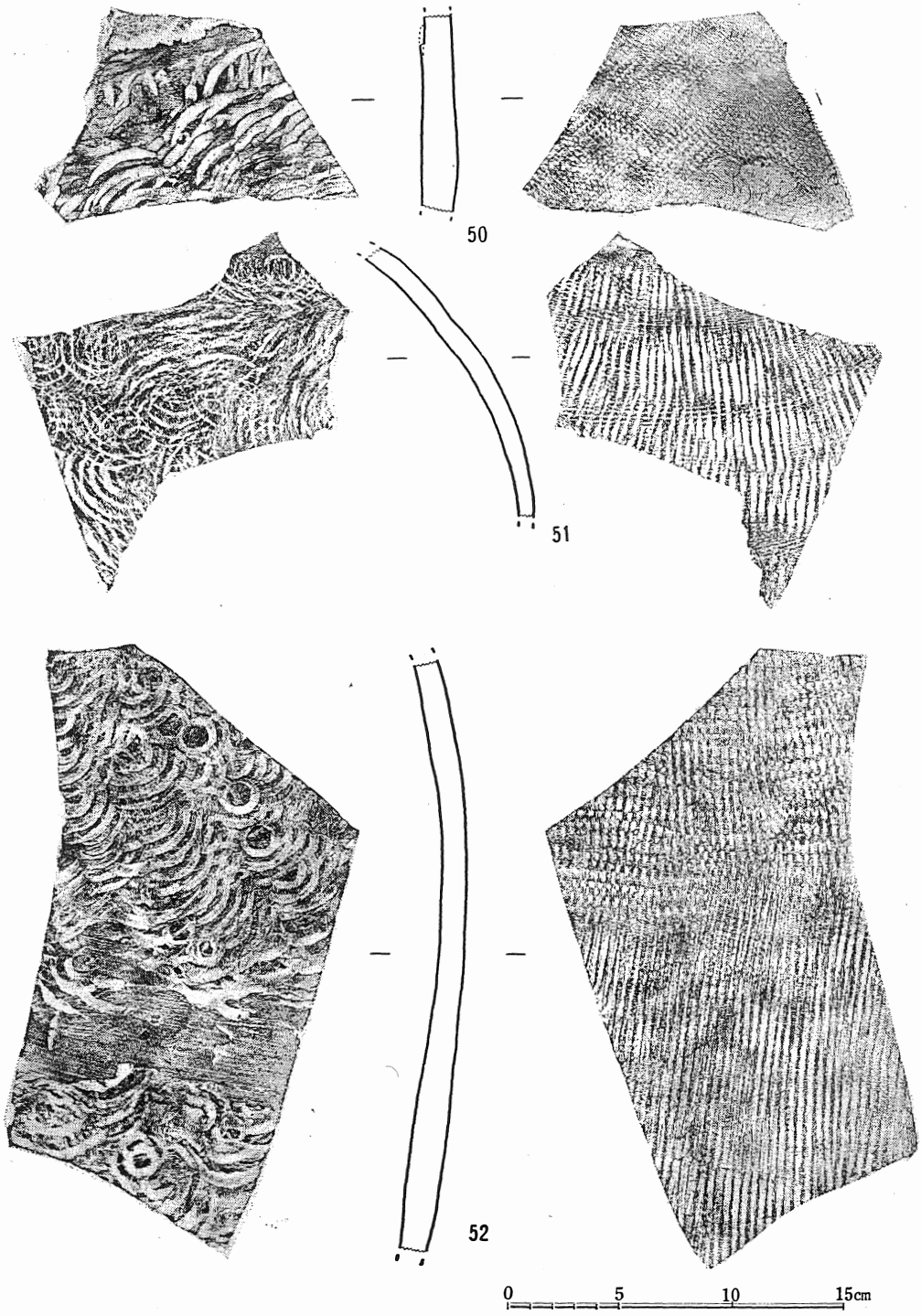
頸部のみ二種類出土している。口径 8cm と 10cm のもので前者は非常に薄手のつくりで口唇は丸い断面となる。後者は二例出土しているが厚手で口唇部内側に段をもち古式の特徴を示している。



第 11 図　　中尾谷第 2 号窯内出土須恵器実測図 (2)



第 12 図　　中尾谷第 2 号窯内出土須恵器実測図及び拓影 (3)



第 13 図　　中尾谷第 2 号窯内出土須恵器甕拓影

提　瓶（39・40）

口径 7cm 前後のやや小形の提瓶の口頸部である。(40)では凸帯をもつ口縁部上面が平坦に作られて(35)と手法的に類似している。

甕（36・41～47）

口径 16～20cm 前後の小形のもの（36・43）と口径 20cm 以上の大形のもの（41・42・44～47）とに分けられる。小形の甕は大きく外彎する短い口頸部をもっており、(36)では壺の場合と共通した口頸部のつくりであるが胴部は厚みがあり、外面は平行線叩き内面には同心円の叩きによって成形されて、その上をさらに撫でによって調整している。(43)は外面叩きの上からカキメ整形した痕跡がみられる。

大形の口径のものでは長い口頸部を有し、口縁部の形態に若干の相違をみせている。大きく口縁部上面を平坦につくる手法と鈍い稜をつくる手法とに区別されるが、口径 40cm を越す非常に大形のものになる（42・46・47）とすべて前者の形態が用いられている。大形の甕にはほとんどの場合頸部が沈線によって 2～3 段に区画されて波状文がめぐらされているがなかには波状文にかわって斜線文を施したものもある(41)。

（真野　和夫）

Ⅲ　第1号及び第2号灰原

（1）灰原の調査（第4図）

第1号・第2号窯の発掘を通じて、道路西下の水田に当る斜面が灰原にあたると考えられるところから、ここに斜面に直交するトレンチを設けて探索してみた。その位置は海抜68mの等高線ぞいで幅50cm、長さ8.5mのほぼ南北トレンチである。地表下 10～20cm で灰原層があらわれ、その深さは85cm に及んでいる。このなかから須恵器の破片が発見されている。この灰原はトレンチ平面の北端から南に 5.3m ばかりで限界に達するが、灰原層の直下は黄色粘質土となり、深いところで 50cm も掘り下げるとさらに新しい灰原層があらわれた。その厚みは 15cm ほどでトレンチの南端まで一様に連続している。これらの層を異にしてあらわれた灰原が二つの窯跡にそれぞれ相当するものであるか、また同一窯跡に属し、操業時の前後を示すものであるかは決定しがたい。この問題を解決するには道路を掘開して第1号窯、第2号窯の焚口まで灰原層を追跡しなければならないので不可能であった。また出土する須恵器からみても様式上から前後を判断することはむづかしい状況である。したがって第1号及び第2号窯の灰原としてあつかわざるをえない。

ところでトレンチの南端近くでは表土下に以上の二つの灰原層と異なる灰原層があって、その厚みは 15cm で、南端から 1.7m のところで限界がみられる。これは道路をこえて上方にたどってゆくと、第一段目と第二段目の崖面に露出している灰原層につながるものである。したがってこれは後述する第4号灰原の末端に近いところと推定された。

（2）遺　　物（第14・15図）

坏の蓋（1～4）

径 13cm 前後、高さ 4cm 程度のものである。上半部は削り整形仕上げ、口唇部内面に段を有する古式の断面形である。形態上二種に大別できる。a類（1・2）は外側の下から 2cm ほどのところに段を設ける古式の癖がある。b類（3・4）は段にかえて一条の沈線を配している。

坏の身（4～8）

以上の二種の蓋と組みあうもので、印籠蓋式の蓋受けは内傾している。口径に大小あり、小形のもの（7・8）は口径に比して深い。

高　坏（11～16）

坏の形態に二種あり、一(11)は坏部が深く、立ち上りも高い。透孔ある脚（14・15）はこれに属する。他の一（12・13）は坏部が浅く、立ち上りも低い。無透孔の脚(16)はこれに属する。いずれも口径、高さ 12cm 前後の無蓋高坏である。

甕（18～20）

口縁下が屈曲し、口唇上面が平坦になる古式の癖を有するもの（18・19）と、やや新しい様式のもの(20)の二種がある。頸部に櫛描波状文が施されている。

短頸壺（9・10）

薄手、口径 7.5cm のもの(9)と、厚手、口径 9.7cm のもの(10)の二種あり、後者は口唇上面が平坦である。脚付壺の形態が考えられる。

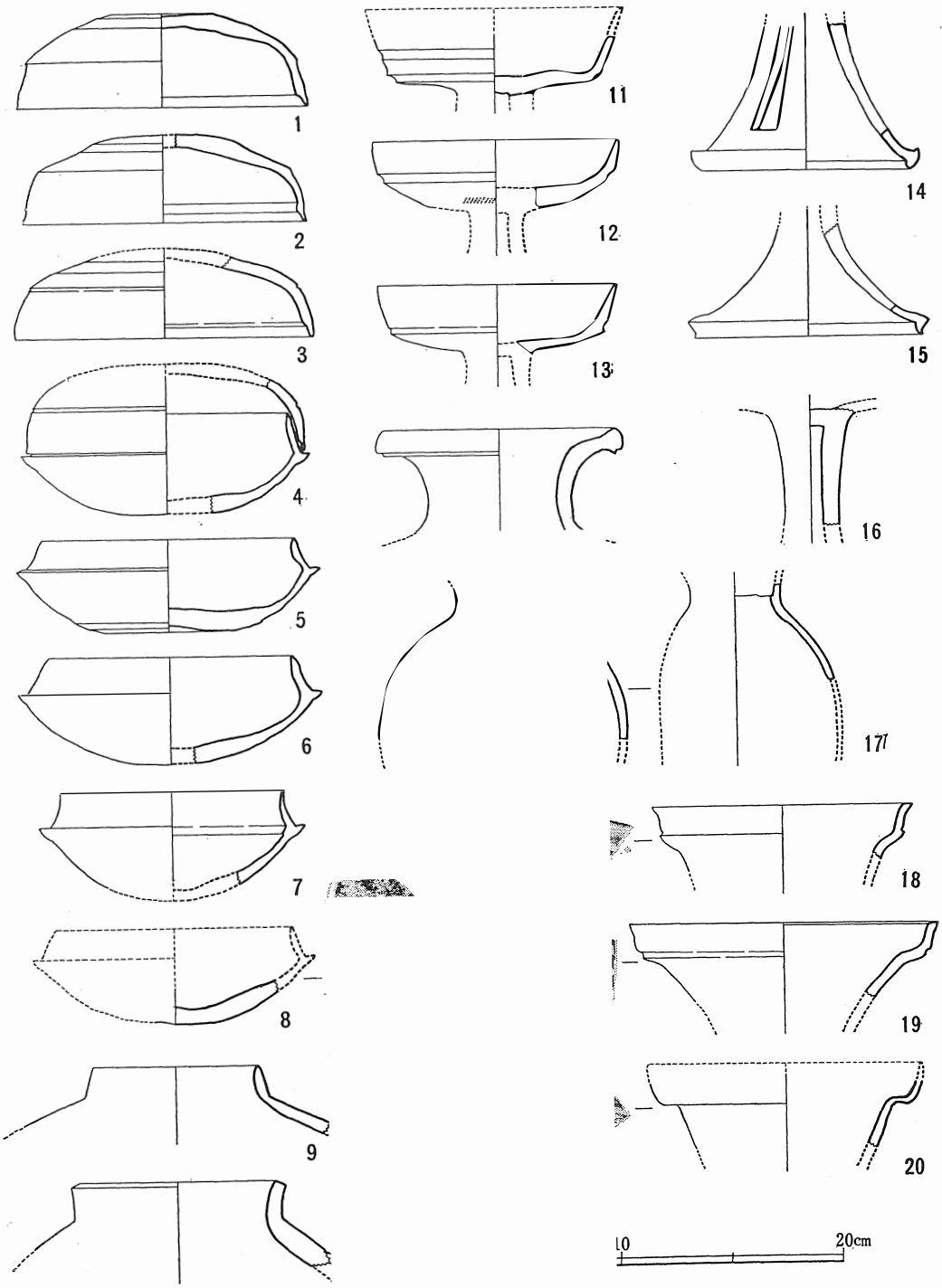
提　瓶（17）

薄手の頸部から胴部にかけての部分がある。側面観の一方が球形、他方が丸味をもった平坦に近い形態をとっていて、提瓶としては古式の特徴をとどめている。

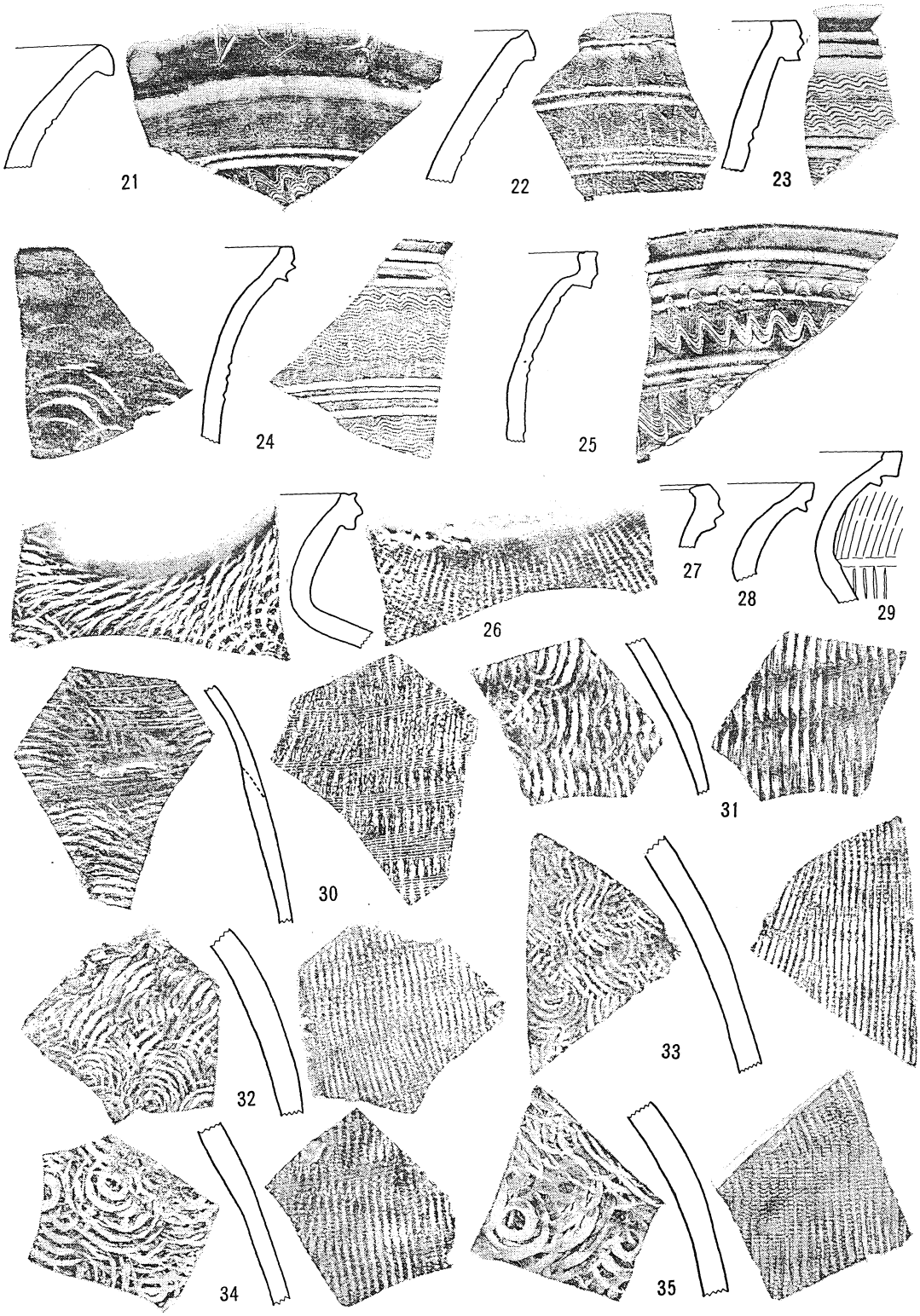
甕（21～35）

口頸部の形態に短頸（26・28・29）と長頸（21～25・27）の二種あり、後者は口径も 20cm 以上の大形品である。長頸部には平行沈線文によって二区以上に分けられ、それぞれ櫛描波状文が施されている。また口縁部の断面形は三角形状に外側に肥厚するもの（21・22・29）に大別できる。胴部には外側に平行条線叩文、内側に同心円叩文がある。

（小田富士雄）



第 14 図　　中尾谷第１号及び２号灰原出土須恵器実測図



第 15 図　　中尾谷第１号及び第２号灰原出土須恵器甕拓影

Ⅳ　第３号窯跡

（1）経過における観察（第４図）

第３号窯跡は、中尾谷窯跡群の西端に位置し標高約 85m の丘陵頂部に近いあたりに煙出しをもつもので四基のうちでは最も高い。したがって、第１号・２号窯跡では窯体の一部が農道の下に遺存し全掘調査が困難であったのに対し、第３号窯跡では窯体を完掘することができた。発掘前すでに窯跡のある丘陵はブルドーザーによって蜜柑畑としての造成がなされたあとで、盛土のため表面からの観察は不可能であったが、切り取られた崖面には厚さ 4～50cm の須恵器片を混入する灰層が各段に存し、灰原であることが認められた。崖面に灰層が認められない四段目に、幅 1m 長さ 8m のトレンチを設定し窯体の確認に努めた。盛土が 1.3m もある上に地山の表土礫層の除去は難行したが、旧地表下約 1.7m で窯体の焚口付近と思われるほぼ水平な黒色灰層の床に到達した。約 1.2m の間隔で両側に垂直な低い壁が遺存している。方向をつきとめる目的でさらに五段目に幅 1m 長さ 4m のトレンチを設けた。ここでも約 2m の盛土があったが、旧地表下 1m で窯の天井らしい部分にあたった。天井のある部分は、約 80cm の厚みの赤褐色砂質粘土層の下、灰色を呈する緻密な粘土の層であった。この部分では天井壁は約 15cm の厚さをもっておりスサ入り粘土は使用されていない。粘土層をそのまま刳り抜いての構築であろうと思われた。

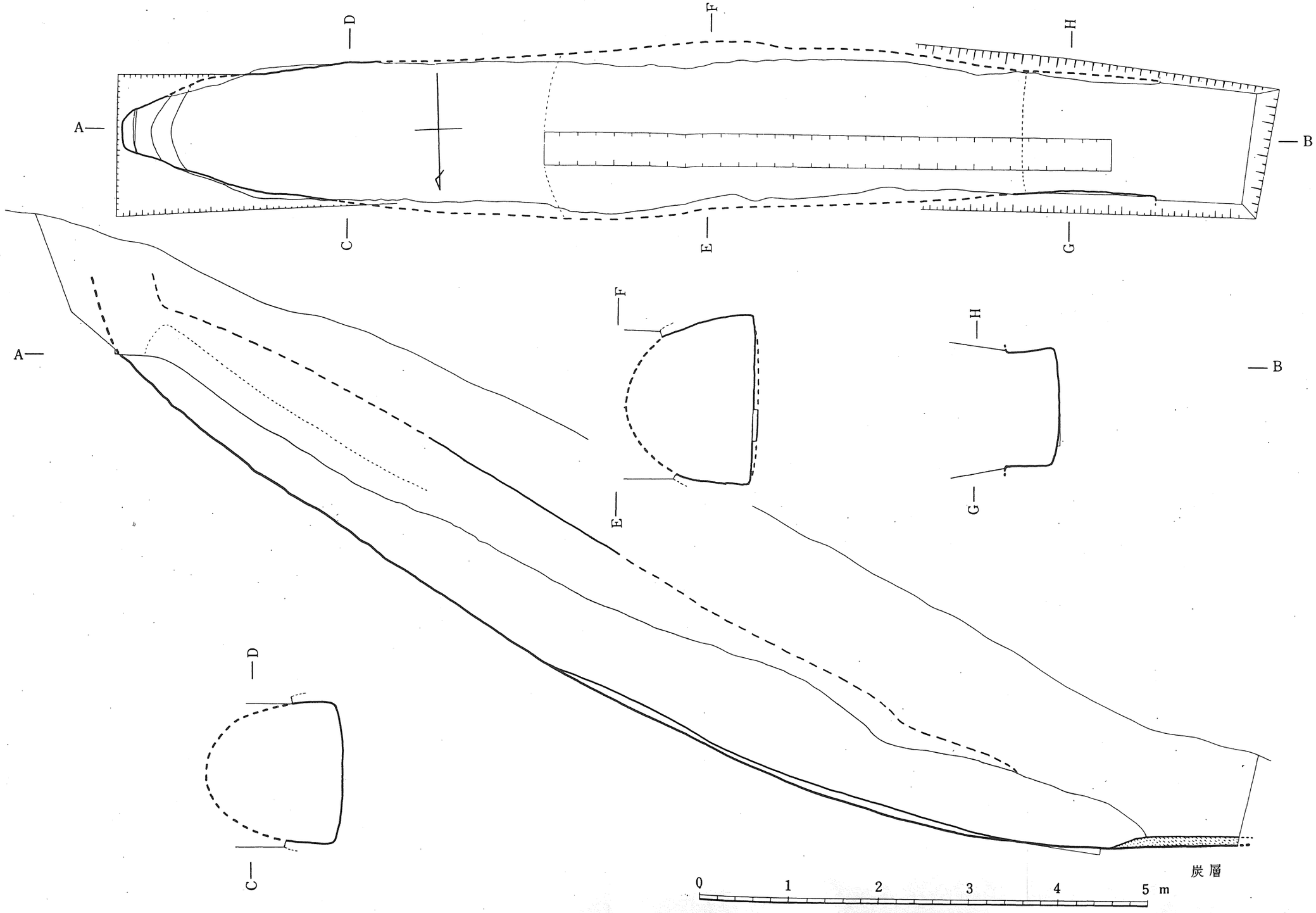
多量の盛土と窯体が予想以上に深い位置にあることは限られた日数での全面発掘調査を困難にするものであった。そこで表土除去までの作業をブルドーザーによって行なったのであった。天井部の一部遺存個所も認められたが危険をさけるためやむをえず取り除いた。六段目で煙出し部分の検出の後は、床面をおって下方へ土を排除してゆく方法をとって作業は順調に進んだ。窯壁は表土除去作業によっていくらか破壊されてはいたが、窯体は焚口付近まで約 12m におよぶものでほぼ完好な状態で遺存していた。窯内遺物は完掘にもかかわらず三つの窯跡のうち最も少くすべて破片である。焼成部下半において厚さ 7～8cm の窯壁破粋片をつき固めたような層が認められた。 中には須恵器片も含まれており、窯構造の改変にともなう床上げ的な構造が考えられよう。

（2）窯　の　構　造（図版第五、第16図）

第３号窯は天井の架せられた位置から煙出しまでの長さ 9.9m を測る。地山の灰色粘土層を刳り抜いて構築された地下式無段登窯で、窯体主軸の方向は N-88°-W である。地山の粘土が焼け固まってそのまま窯壁を形成しており、一部にスサ入り粘土の使用がみられるのは後の補修によるものであろう。床面の傾斜は焼成部中央付近で32°を示している。

焚　　口

床幅 1.3m である。ここより灰原の方向に 2.5m まで前庭部の発掘が行なわれたが、12～3cm の灰の堆積層があるのみで舟底状ピットの存在は確認されていない。壁はほぼ垂直で約 60cm の高さまでが焼け固まって変色している。



第16図　中尾谷第３号窯跡実測図

燃　焼　部

床面は焚口から同じような勾配で傾斜しており燃焼部と焼成部を明確に画することはできないが、焚口から1.5～2m のあたりまでが燃焼部であろう。床幅は徐々に広くなり、床面角度は約25°である。

焼　成　部

煙出しまで全長約 8m で床幅は焚口から 3.5m のところで最大となり 1.9m である。側壁はこの部分で剝落が最も著しいが、二回におよぶスサ入り粘土による補修が加えられた痕跡が認められる。床幅はここより煙出しに至るまで徐々に狭くなってゆくが、窯体中央部で床面傾斜がやや急になり32°を示す。床面堆積層はこれより焚口まで続き、主軸に沿って幅約 40cm のトレンチを設けてその状態を観察したところでは、厚さ約7～8cm を測る。壁の破粋片を主体とするもので小量の須恵器片の混入がある。はじめにトレンチを設定した部分は、この焼成部の中央付近であたるがその際の計測によると天井の高さは 1.6m であった。

煙　出　し

焼成部は最も奥で幅 50cm となり煙出しへと連なる。現在では削られて構造はまったく残っていないが、その位置が比較的深いことから垂直に近い角度で煙突状に抜ける構造が考えられる。

（3）窯内遺物の出土状態

第3号窯跡の窯内で発見された遺物はきわめて少いものであり、すべて破片になっていてまとまった状態で発見されたものではない。器種も非常に限られており蓋坏と瓶それに甕の口縁部が一片であった。

（4）灰原の調査（第4図）

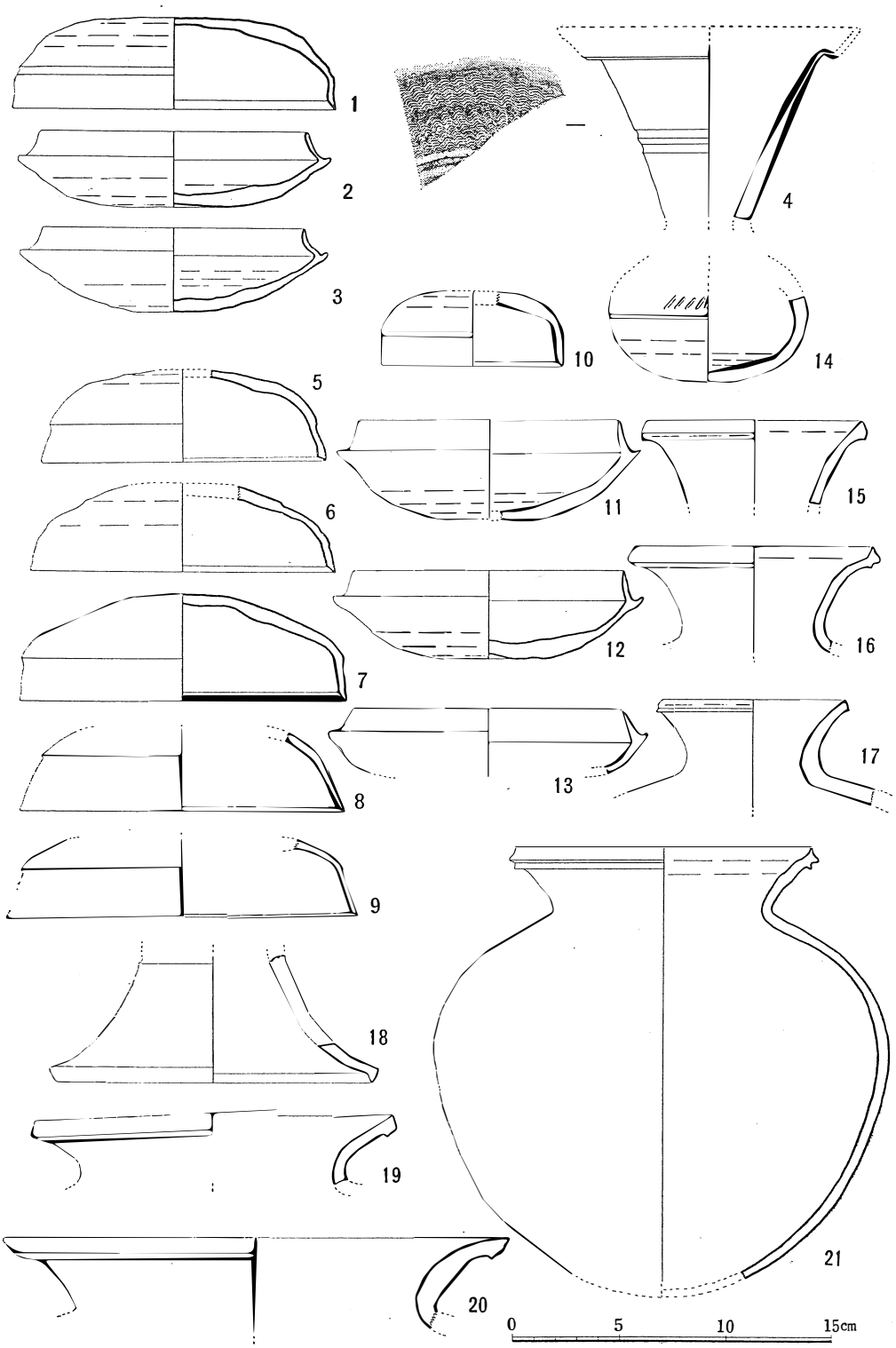
窯体の発掘調査に先行して灰原の調査を行った。灰原の上にも盛土がなされているため時間的制約から崖面での灰原の追究によってその範囲を確かめることと、できるだけ多くの資料を採集することに努めた。

等高線に平行する崖面での観察からは一段目と二段目に灰層が認められたが、三段目では崖面には現われていなかった。したがってこの部分にトレンチを設定して探索すると、灰層は幅・厚さともに減少しており、幅 4.5m の浅い溝状の遺構が検出された。この溝は焚口に連なるものであろうと思われる。これから灰原の中心は二段目崖面にあることが推測され最大幅約 10m、長径約 15m の長楕円形の灰原を形成していたことが知られる。灰原が窯体主軸と若干くい違っているのは、窯体主軸が等高線にやや斜行することが原因であろう。灰層の傾斜は前庭部から灰原中央部あたりまでは約15°であり、それ以下の部分では30°の勾配をもつ。灰層は最も厚いところで約 50cm で遺物はあまり多くは含まれていない。また灰原の堆積状態はほぼ一様で層位的差違はみられない。

（5）遺　　物（第17図）

坏の蓋（1・5～9）

(a) 天井部と体部との境に段を有するもので（5・7～9）などが含まれる。口径は13.5～16.5cm



第 17 図　　中尾谷第3号窯内及び灰原出土須恵器実測図（1～4窯内、5～21灰原）

とやや幅がある。口唇内側には鋭く段がつくられ古式の特徴をもっている。

(b) 天井部と体部との境に沈線をもつものである。(1)は窯内出土で、口径 15cm 高さ 4.3cm ある。口唇部のつくりは(a)に比べ若干鈍くなっている。

坏の身（2・3・11～13）

最大径は 15cm 前後あり、灰原出土のもの（11～13）に比べ窯内のもの（2・3）では蓋受けの高さがやや低くなるとともに内傾度がます。全体に扁平な形態が目立つ。

高　坏（18）

脚部1例のみの出土である。脚端径 15cm を測る大形のものである。脚端の形態は中尾谷2号窯遺物でも一般にみられた短く下降して稜をなすものである。透孔を有する。

甕（4・14）

口頸部は窯内の出土である。口縁部を欠いているが、2号窯遺物でもみられたように大きく外彎しつつ開く形態となると思われる。頸部中央の沈線から上部には波状文を施す。

坩の蓋（10）

口径 8.5cm 高さ 3.5cm である。肩部には段を有し、そこから垂直に近く下降して口縁部をなす。また口唇内側には段を有し全体として古式の感じをよく残していて入念である。

壺（19・21）

口径 14～16cm で大きく外反する口頸部をもつ。口縁部には凸帯を有し、口唇上面は鈍い稜をなす。(21)は内外面とも叩き成形したのち胴部の約1/3以上の部分では内外面とも撫消している。器壁が非常にうすい。

提　瓶（15～17）

口径 8～11cm あり、口唇部の形態に多少違いがみられるが、上面が平坦になるものはない。

甕（20）

小形の甕で、口頸が短くて強く外反する形態をとる。口径は約 23cm である。

（真野　和夫）

V　第4号灰原

（1）灰原の発見（第4図）

道路ぞいの第一段目切通しを検討中、第2号窯跡の南 4m ばかりで炭灰にまじって須恵器片を含む灰原層の存在が確認された。切通しにあらわれた灰原層の幅は 5.5m で、第3号窯跡の灰原層とは明らかに区別される。そこでさらに第一段目と第二段目の間の崖面を検討したところ、幅 1.6m ばかりの灰原層があらわれた。また道路西下の第1号、第2号窯跡灰原の探索トレンチでは前述のごとくトレンチの南端より 1.7m のところまで灰原層がみられたが、これが道路切通しの灰原層につづくものである。しかもトレンチにあらわれた灰原層は第1号、第2号窯跡の灰原層とは間層をはさんで上層にあって、操業時期は新しい。

以上の発見によって復原される灰原層の範囲は東西約 14m、南北最大幅4.7mとなって、第二段目から第三段目にわたって第2号窯跡とほぼ平行する窯跡があることが推定できる。したがってこれを未発掘であるが第4号窯跡とする。

（2）遺　　物（第18図）

灰原層はうすく、包含遺物も少いので、時期の判別に必要な程度の資料を採集するにとどめた。

坏の蓋（1・2・5）

径 14～15cm、高さ 3～4cm で外面下から高さ 2cm ばかりのところに段を設け、口唇部断面にも段を設けていて古式須恵器の特徴を継承している。

坏の身（3・4）

径 14cm 前後、高さ 3～4cm で、印籠蓋式になる蓋受けは高さ 1～1.5cm で立上りはやや内傾している。

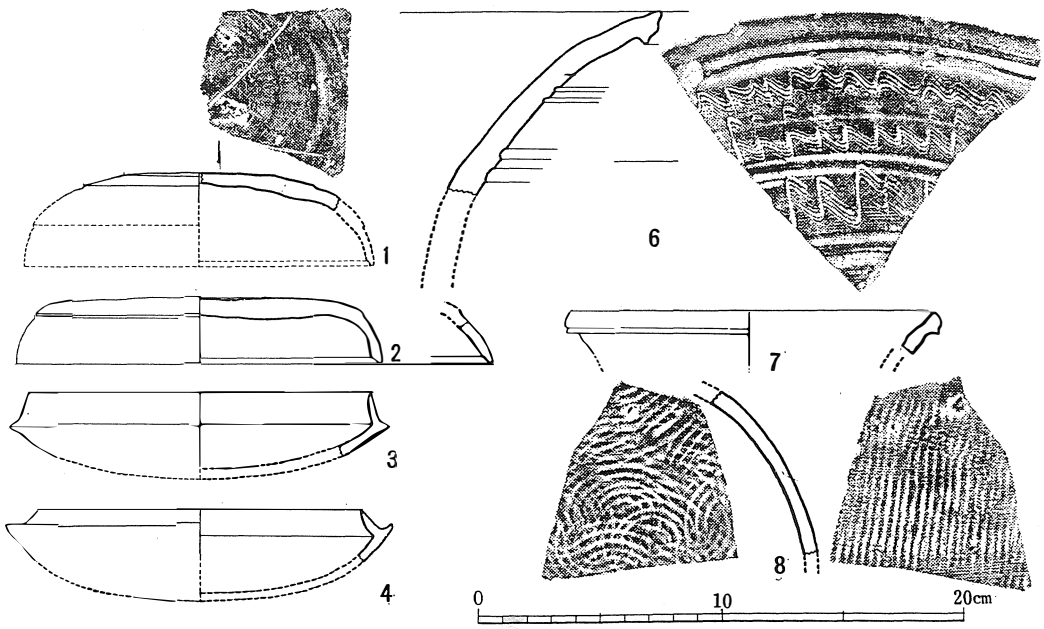
壺（7）

口径 14.7cm、朝顔形に開いた口頸部の破片である。口唇部断面は三角形で外側に肥厚する特徴を示している。

甕（6・8）

大形甕の口頸部と肩部の破片がある。口縁部の断面は壺形に共通した特徴があり、頸部には平行複線によって三段区以上に分けられ、各区には櫛描波状文が施されている。胴部には外面に平行条線叩文、内面に同心円叩文が施されている。同心円の叩きあとはやや細身で古式須恵器の特徴を継承している。

（小田富士雄）



第 18 図　　中尾谷第4号窯灰原出土須恵器実測図

第４章　総　　括

Ⅰ　中尾谷窯跡群の構造と特色

前回の塚ノ谷窯跡群を中心とする調査においては、須恵器第ⅢＢ期から第Ⅳ期に及ぶ各期の窯跡を発掘して各時期の窯構造の実態を知ることができた。しかしながら第Ⅴ、Ⅵ期の窯三基に対して第ⅢＢ期の窯は一基であり、後者は６世紀代の窯一般をうかがう資料とするには床面構造などにやや特殊な窯ではないかとみられる疑いもあって、なお今後の発掘調査例を加える必要があった。また第ⅢＡ期の資料は前回報告書で三助山窯跡をあげたが、窯構造の実態は不明であった。以上のような問題点をかかえていたので、今回の中尾谷窯跡群の発見及び発掘調査は、これが第ⅢＡ期の須恵器窯跡であり、しかも同じ時期の窯跡が四基も集中していたことで恰好の資料と考えられた。

中尾谷窯跡群は四基の存在が知られたが、諸種の事情で完掘できたものは一基、部分的発掘を行なったものが二基、灰原の確認によって存在は知られるが未掘のもの一基という内分けである。いま調査した三基についてまとめれば次表のようになる。

	長さ(cm)	幅（cm）	高さ(cm)	方　位	傾　斜	出土品
第１号	910(+)	226	130～70	N76°E	22°～36°	須恵器
第２号	1270(+)	225	160～80	N82°W	28°	須恵器
第３号	990	190	160	N88°W	25°～32°	須恵器

窯跡はいずれも刳りぬき式の無段登り窯の形式で、全長10m以上、13m未満である。第４号窯は灰原の一部を確認するにとどまったが、その重層関係からみて第１号、第２号窯より時間的に新しい。しかも窯跡の立地は、第１号、第２号窯が山丘斜面の中位にあり、第４号窯はこれよりやや高位にある。第３号窯は頂上近くにある。このような関係からみて、窯構築の順序は第１号・第２号窯→第４号窯→第３号窯であったと思われる。乃ち、山腹から頂上近くへという低位から高位への推移が指摘できるのである。この傾向は塚ノ谷窯跡群における古墳時代から歴史時代への推移のなかにたどられたと同じような指向性を示している点が注意される。中尾谷窯跡では八女平野にのぞんでいて、西南からの風を正面から受ける位置にある。低位から高位への移動はこの風向と風力を最大限に利用するためのものであった。窯跡の方向が西から西南よりに変化する傾向があることも見のがせないところである。 窯内の傾斜も30°前後で、塚ノ谷第４号窯より急傾斜であって、吹きこむ風が窯内を上方に通過する強さも調査中に体験することができた。

原料粘土の採取については、三助山から中尾谷にかけての山丘一帯が表土下に粘土層を基盤にしていることから容易に採取できたであろうことが知られた。塚の谷から牛焼谷にかけての前回調査地域とは谷地形をはさんで地質構造がまったく異っている。塚ノ谷窯跡の土器製作者達も谷地形を越えて東側の山丘に至れば原料の入手は容易であったろう。

中尾谷窯跡において完掘された窯跡は第3号窯跡だけであるから、窯構造の面で第Ⅲ期須恵器窯の構造一般を論ずるのは、なお時期尚早かとも思われるが、塚ノ谷第4号窯の構造がやや特殊なものであったと思われる点は一層指摘できるようになったであろう。また第3号窯跡では塚ノ谷窯跡群の場合にみられた焚口前の凹み穴は発見されなかった。

最近明らかになった筑前地域の同時期窯跡[1]と対比してみるとき、八女古窯跡のものは長さにおいて長く、窯床の傾斜は急である。今後、窯構造の検討は時期別だけでなく、地域別にもすすめる必要があろう。

（小田富士雄）

註(1)「野添・大浦窯跡群」（福岡県文化財調査報告書第43集）昭和45年

Ⅱ　中尾谷窯跡群の須恵器　—第Ⅲ期の須恵器—

前回調査した塚ノ谷窯跡群のうち最古期に位置ずけられたのは第4号窯跡であった。この窯跡で生産された須恵器には蓋坏、高坏、瑞、坩、壺、脚付壺、鉢、提瓶、平瓶、甕の器種が確認され、その示す特徴から第ⅢB期に比定された。

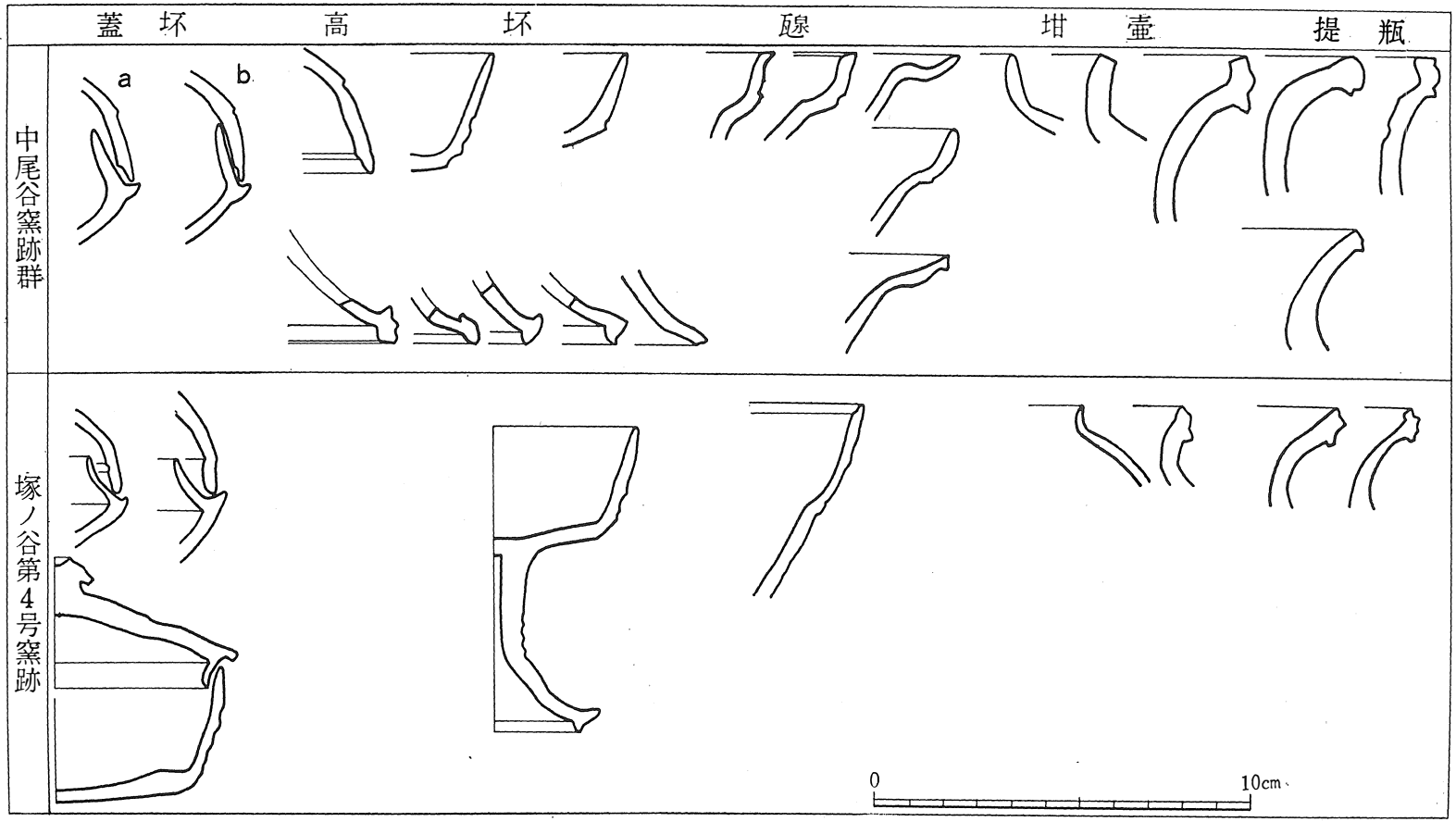
ところで調査報告Ⅰには三助山窯跡群出土の須恵器資料を収録したが、この中には塚ノ谷第4号窯よりさらに古い第ⅢA期のものが含まれていて注目され、乗場古墳出土須恵器との類似も指摘されたのであった。しかし、三助山窯の須恵器は発掘時に厳密に組みあわせを注意して蒐集されていない憾みがあった。中尾谷窯跡群の須恵器はこのような欠をおぎない、更に第ⅢA期の実態を検討する上で貴重な資料となるのである。

中尾谷窯跡群の須恵器は、四基の窯別にみても共通したものを含んでいて、第ⅢA期内における窯構築の時間差と考えられるので、第ⅢB期の須恵器と対比するかぎりでは一括してとりあつかって支障ないようである。もともと第Ⅲ期の須恵器の設定に際しては、古式須恵器から量産化と規格化の著しい新式須恵器への過渡期としての意味を考えたのであった。さらに第Ⅲ期をA、B二小期に細分したのは第ⅢA期は第Ⅱ期に通じる特徴の残存があり、第ⅢB期には第Ⅳ期以降に普遍化する新しい要素の萌芽がみられる。このような観点から中尾谷窯跡と塚ノ谷第4号窯跡の対比を行なってみる必要がある。

中尾谷窯跡群発見の須恵器には蓋坏、高坏、瑞、坩、壺、提瓶、甕の器種が確認されている。

蓋坏には大別して二種あり、身よりも蓋に特徴がある。乃ち、a類は外側に段を設け、b類では一本の沈線をめぐらしている。共に口唇部の断面が段を有している古式の特徴を継承している。a類がb類に先行する形式であることは論をまたない。第ⅢB期にはa類は姿を消している。

高坏には有蓋、無蓋の別があり、有蓋式は第Ⅱ期に出現する長脚式透孔ある大形品の系統をうけたもので、蓋も坏におけるa類の形式である。無蓋式のものは有蓋式にくらべて小形となるが、長脚式透孔あるものはやや大きく、全体の高さ、坏部や脚裾部の径も 12cm 前後となる。一方、さらに小



第 19 図　　中尾谷、塚ノ谷窯跡出土第Ⅲ期須恵器細部対照図

形で以上の各部の法量が 10cm 程度のものがある。これは塚ノ谷第4号窯の高坏に継承されるものである。有蓋長脚式の高坏は第ⅢB期には姿を消すようである。各種器形のなかでA期からB期への移行を通じて高坏の小形化が最も著しい現象である。

瓶は口縁下で屈曲して段を設け、口唇上面が水平或は段を有する断面形をとる古式の特徴をうけたものと、外側における段や沈線が消失して薄手の、おそらく口唇上面の古式の特徴を消失しつつある過程のものの二種がある。塚ノ谷第4号窯跡のB期に比定される瓶は屈曲した段部が消えており、口唇部にはまた段の痕跡がのこされているもので、中尾谷窯跡例からはただちに導き出されないが、三助山窯跡の例を加えるならばその推移はスムースにたどられる。

提瓶は口縁断面が外側に肥厚し、沈線を加えるなどの共通した特徴がA、B両期を通じてみられるが、これは壺、甕などの大形品とも通じる癖といえよう。特に口唇部上面を水平に仕上げる癖は、調査報告Ⅰにも指摘したようにこの地方の提瓶にみる特徴かと思われる。これは今回の調査によってA、B両期を通じて行われていることが確認できた。中尾谷窯跡では高坏の脚端にこの癖をもつものがある。また胴部の側面観において一方が球状に張り出し、他方が平坦になるが、その移行は漸移的なもので、第Ⅳ期以後にみられるような極端な平坦面を形成するにはいたらない。

長頸脚付壺、平瓶の存在は中尾谷窯跡では確かめられていない。甕におけるA、B両期の差を明確に示すことは未だむづかしいようである。

以上、要するに第Ⅲ期の須恵器にみられる特徴は、八女地方の特性を含みながらも全体としては古式須恵器から新式須恵器への過渡的様相を示すものであって、これまで古墳出土の須恵器によって組み立ててきた編年観を窯跡の方面でも実証できたのである。A、B二小期の細分によって古式の特徴の残存と、新しい須恵器の特徴の萌芽という現象が明確にできることとなる。

（小田富士雄）

Ⅲ　八女古墳群発見の須恵器集成

八女古窯跡群に最も近接している八女古墳群は東西数粁にわたって連なる八女丘陵上に数十基以上群在している。五世紀代にはじまり終末は七世紀代にまで及ぼうとしている。これら古墳群の分布については前回の調査報告Ⅰ（巻首地図）に登載し、またこれら古墳群の性格についても別にふれたことがある(1)。八女古墳窯群で生産された須恵器はこれらの古墳群に供給された公算が大きく、したがって八女古墳群発見の須恵器資料を蒐集して窯跡資料との対比を行なって需供関係を確実にすると共に、八女古墳群の編年的序列を明らかにする必要を感じている。前回の報告Ⅰでは乗場古墳、立山古墳、団蔵塚古墳などの須恵器資料を提示してすでにその端緒を示したのであったが、今回は改めて八女古墳群の資料を総覧的に集成して、先ず基礎資料をそろえることを意図した次第である。勿論本稿をもってして完成は期し難いので、今後補充をはからねばならない。今回の登載資料はすでに数年前から時にふれて蒐集していたものであるが、九州大学、福岡教育大学、県立小倉高校、八女市見崎中

学校、同忠見小学校、 同長峯小学校、八女市教育委員会、 岩崎光氏などに収蔵されているものである。調査にあたって関係各位から与えられた御好意に感謝申しあげる。

1．八女市吉田岩戸山古墳群（第20.21図）

岩戸山古墳は筑紫国造磐井の墳墓として有名な前方後円墳であるが、未掘である。大正13年に大神宮祠堂新築のために、後円部南側の一部を削除した際に埴輪円筒４～５個、須恵器片百余個、大甕、高坏、坩、提瓶、大形器台など10数個、石人破片２２個、石馬破片１個、槍身１個が発見された(2)。前方部の南に接してこれらの遺品を収蔵する石人堂が立てられたが、第二次大戦直後破壊されて、訪れる人々によって持ち去られて今日須恵器は完全に現地からなくなってしまった。今日、それらのいくつかが各所に保有されているのは不幸中の幸いである。文献史料に徴して築造年時を知りうる西日本唯一の古墳であるから、須恵器編年の上限を劃する重要な意義をもっている。おそらく墓前祭に使用された須恵器であろうが、一時期に限られることなく、後続する資料も追加されたようである。石人堂にあった散逸前の須恵器実測図が岡崎敬氏によって作成され、梅原末治博士の手元に原図が所蔵されているが、本書には登載できなかった。また、岩戸山古墳の東にあたって乗場古墳があり、古く金銅製唐草文透彫杏葉、須恵器を出土した横穴式複室構造の装飾古墳である(3)。報告Ⅰ（67頁）にその須恵器実測図を掲げておいたので参照されたい。これは須恵器編年の第ⅢＡ期に相当する。

大型器台（１～４）

(1) は所謂百済系といわれる器台で現在受皿部と円錐台形の脚部を欠損している。受皿部の下につくられるふくらみが退化してそのまま円柱部をなしている。透孔は、最上段の円孔のみ１孔で他は３孔が各段互い違いに透されている。 円柱部を画する沈線の上には それぞれ３個の小円板の貼付がある。最上段の沈線の上下および円柱部から円錐台部への変り目には刺突文が施されている。波状文は細く整美である。焼成はあまり堅緻とはいえない。（九州大学考古学研究室蔵）

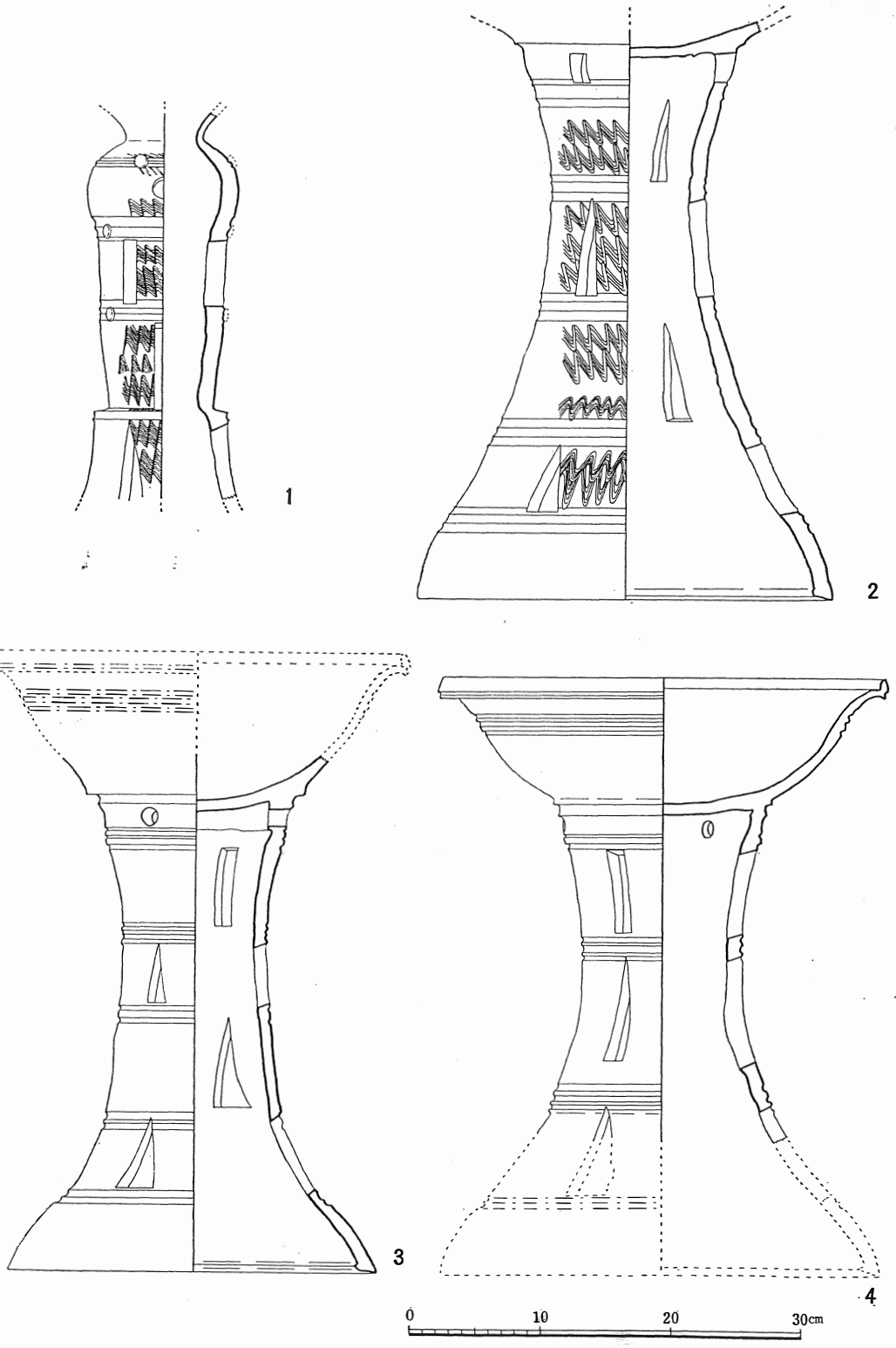
(2) は福岡教育大学所蔵の高坏形の器台である。現在坏部を欠いているが同型式のものも含めて最も大型である。(3､4) は福岡県小倉高校所蔵のもので一方は坏部を他方は脚部を欠損している。したがってやや大きさは異なるがほぼ復原が可能である。 (3) では透孔は千鳥式に透され五段であるところは(2)に近い。(4) では最上段の円孔を除いて他は同じ直線上に透されている。脚部の形態にはほとんど差違はなく、長くのびた脚の中央部で最も狭くなりラッパ状に開く。坏部は古式のものに比べてやや浅い形となる。(3､4) の場合も坏部外面、脚部には波状文が施されるのは同様である。須恵器編年の第ⅡＢ期に属する貴重な資料である。

高　坏（５）

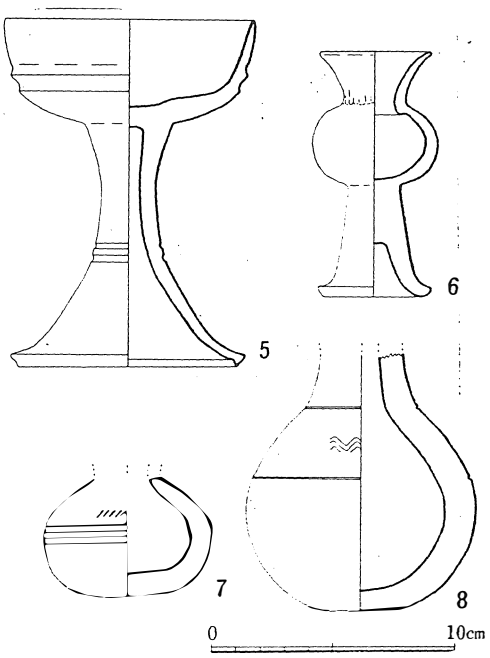
口径約 10cm あり長脚系に属するものであるが脚部に透孔は有しない。脚端は短く下降して稜をなす形態のものである。上記の器台の時期よりやや下降する可能性が強い。

脚付小型坩　（６）

高さ10.3mの土師器小型品で表面は縦あるいは斜方向のヘラ磨きが行なわれ、表面および口頸部内側には丹が塗布されている。



第 20 図　岩戸山古墳出土器台実測図



第 21 図　岩戸山古墳出土土器実測図
（5、7、8須恵器、6土師器）

瑕その他　(7、8)

(7)は瓩の胴部であるがどちらも焼成が悪く、(8)では黄赤色を呈し土師質に近いものである。胴部には波状文をめぐらしており、形態的に他に類例をみない。（以上4点は筑後市岩崎光氏蔵）

2．八女市宅間田善蔵塚古墳（第22図）

宅間田部落の背後丘陵上にある前方後円墳である。近年整地工事にかかろうとしたが危くとりとめて保存された。未掘である。須恵器は整地にあたって封土から発見された。この南に二基の円墳があり、西寄りを千人塚、東寄りを円山と称している。円山古墳は古く開口し、なかに彩色壁画があるため再び閉塞して保存されている。

坏の蓋（1・2）

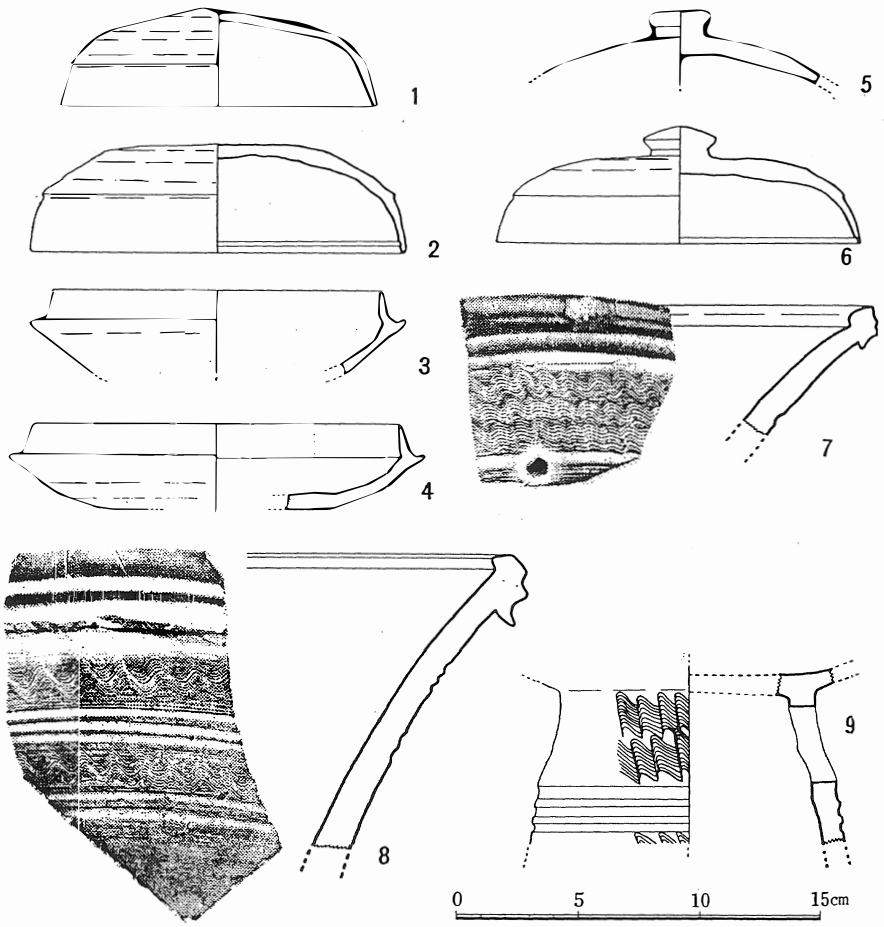
口径 13～15cm、高さは 4cm 前後である。天井部から体部への変り目には段を有する。口唇のつくりは(2)では内側に沈線状を呈して古式の名残が認められるが(1)ではすでに省略されている。

坏の身（3・4）

最大径 15～17cm を測る大型のものである。蓋受けはそれほど高くはないが内傾の度合はまだ進んでいない。口径の大型のものほど扁平性が強い。蓋・身とも須恵器第ⅢA期に相当する。

高坏の蓋（5・6）

(9)は口径 15cm あり、肩部につくられた段および、口唇には、古式の特徴を具えている。撮みの形態において(5)と(6)では多少変化がある。



第 22 図　善蔵塚古墳出土須恵器実測図

甕（7・8）

(7)・(8)はともに口径 46cm の大甕である。口唇の形態において(8)は上面が平坦となっており中尾谷窯跡群出土遺物との共通点を有す。

器　台（9）

(9) は大型器台の一部坏部から脚部への変り目で、他にも数点破片がある。岩戸山古墳出土の資料とはやや異なっており坏部との接合部から直接ラッパ状に広がる傾向をみせている。方形あるいは三角形の透孔が入るとみられるがはっきりしない。波状文は非常に整美である。

（以上 9 点は八女市長峯小学校蔵）

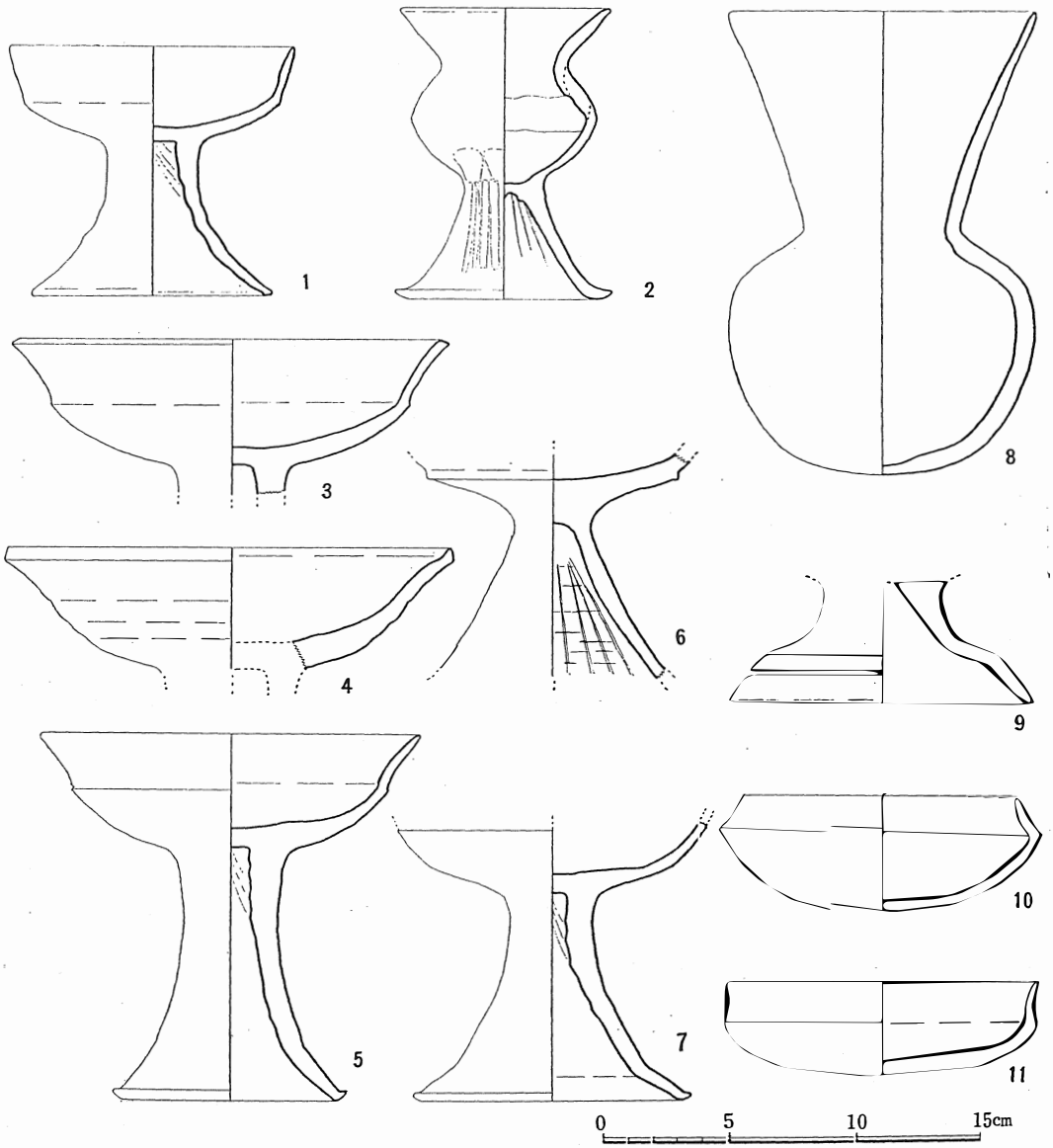
3．八女市豊福釘崎第 3 号古墳

豊福部落の背後丘陵上には三基の前方後円墳と多くの小円墳があり、豊福古墳群と称されている。その正確な数はまだ不明である。釘崎第 3 号古墳はその最北端に位置する前方後円墳で、前方部北向きである。外観はやや削平されている感があったが、昭和44年 3 月整地工事によって市教委関係者も

知らぬうちに突如破壊され、未調査のままに湮滅してしまった。その直後、通報をうけて市教委に多くの出土品が帯帰され保管された。聞きこみによると、横穴式単室古墳であったらしい。出土品のなかに脚付壺、提瓶、高坏などの須恵器資料がある。第ⅢB期に属する。本古墳については遺物全部にわたって次回調査報告に収録する予定であるので、本書には割愛する。

4．八女市立山古墳群（第23図）

立山部落の背後丘陵上にある古墳群で、立山古墳、団蔵塚古墳や東寄りの山麓には巨石古墳一基がある。また近年立山部落の東端山麓に丸山前方後円墳一基が発見された。立山及び団蔵塚古墳発見の



第 23 図　立山古墳群出土土器実測図　（1須恵器、2～11土師器）

須恵器資料については調査報告Ⅰ（71頁）に実測図を掲げたが、ここでは須恵器の器形や製作技法の影響を著しくうけた土師器が伴出しているので本書に収録しておくこととする。

高　坏（1・3～7）

(1) は口径 11cm 高さ 10cm の須恵器の高坏である。所謂小型高坏といわれるものに属するが、乗場古墳あるいは塚ノ谷第4号窯出土の資料よりも若干大きくなっており、坏部や脚の沈線が省略されている。（3～7）の高坏は土師器で胎土は明かるい茶褐色を呈する。成形にあたっては脚部にしぼりの手法を用いたり調整にミズヒキを行なうなど製作技法および器形までも須恵器の影響を強く受けているが、坏部や脚の形態は明らかに土師の系統を引くものである。特に(3)・(4)の坏部の屈曲部や、(7)の脚裾で広がる特徴、あるいは(6)における脚内面のヘラ削りなどが指摘される。

脚付坩（2）

(2) は高さ 11.5cm の土師の脚付坩である。外面はヘラ磨きのあと黒漆を塗布していた痕跡が残っている。坩部は三つの部分を接合して形成している。胎土は他の土師器より緻密であり脚部内面はヘラ削りである。

長頸壺（8）

高さ 18cm の土師器である。胎土は（3～7）の高坏とまったく同様のものである。

脚　部（9）

(9) は形態的には須恵器の脚付壺に付くものとほとんど変りがないが、脚端が丸くなるところがいかにも土師の感じを与える。胎土は（3～7）のものと同様である。（以上　福岡教育大学蔵）

坏（10・11）

明褐色の良質胎土で生成された土師器であるが、上部で稜を設けて口縁を屈折させ蓋受けをつくっている。(10)は蓋受けが内傾するが(11)は内彎気味に直立する。明らかに須恵器坏の影響下に成立したものである。内面に黒漆かと思われる塗布が全面にみられ、外面は剝落して所々にのこっている。

5．八女市平原、平原（弘法谷）及び同大籠、日当山古墳群（第24・25図）

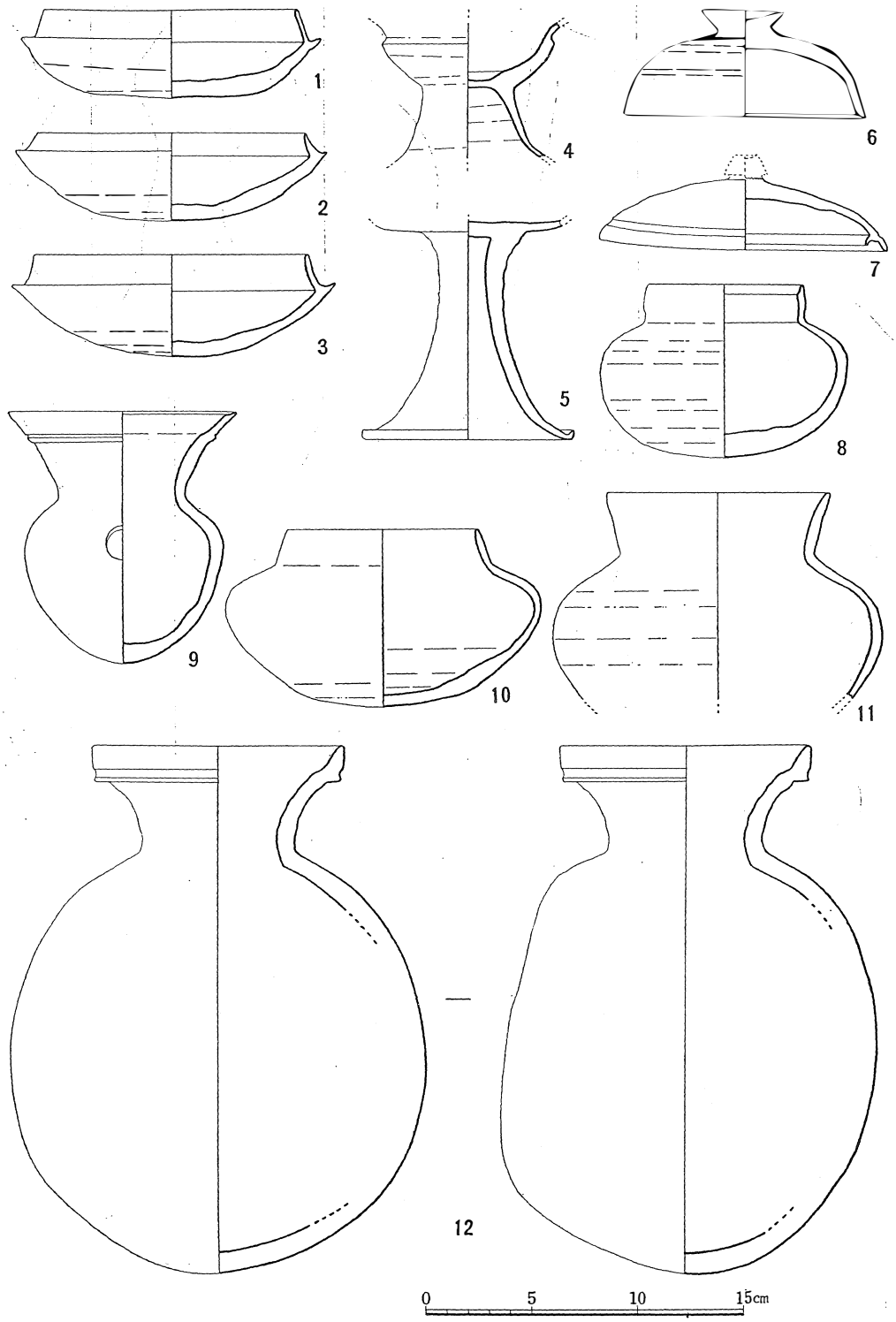
平原部落の背後に平原（弘法谷）古墳群、大籠部落の背後に日当山古墳群があった。数年前より蜜柑園造成のため未調査のまま次々と破壊されて湮滅してしまった。その折々に小、中学生達に採集された須恵器資料が地元学校に保管されている。すでにどちらの古墳群に属するものか判定できないものが多いので両古墳群の資料として一括して扱うこととする。

坏の身（1～3・17）

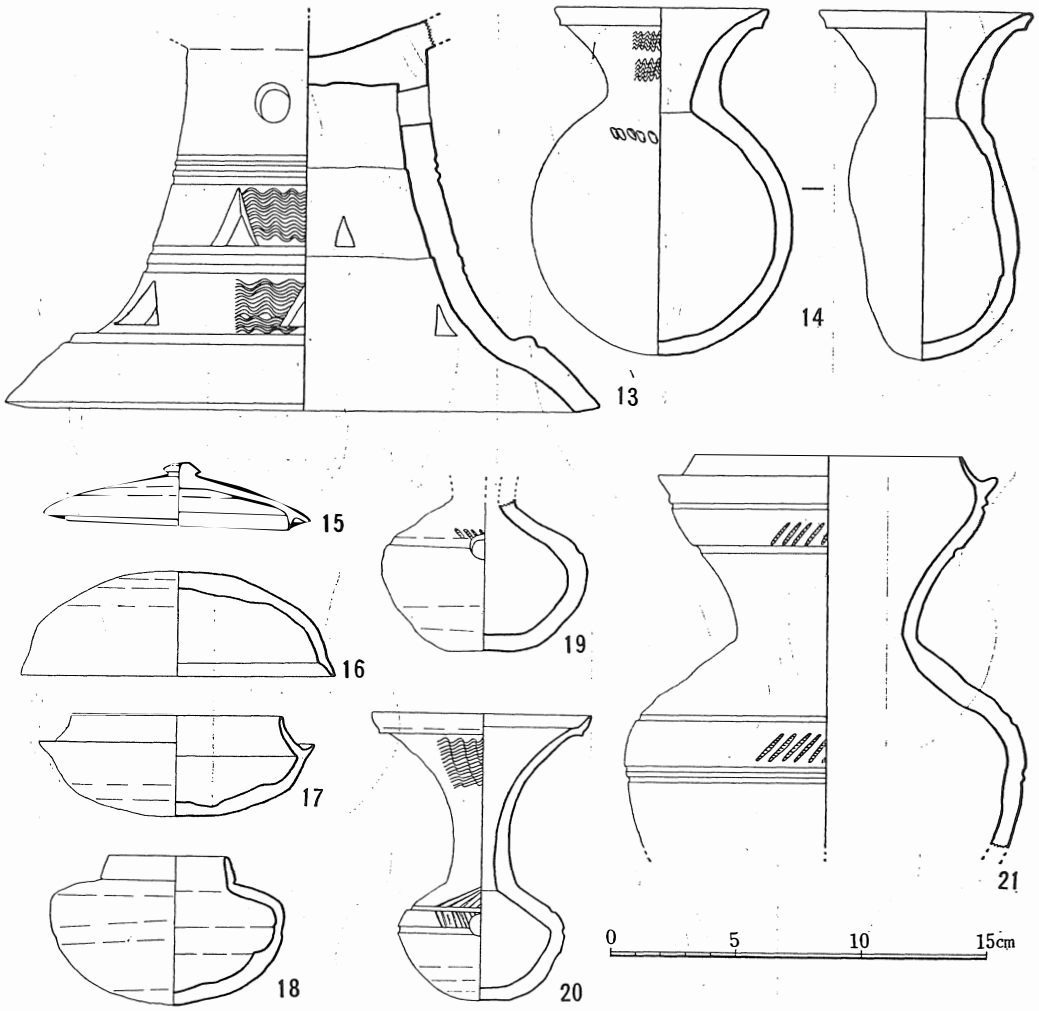
（1～3）と(17)とでは口径にかなりの相異がみられる。前者はおよそ 15cm 前後の最大径をもつのに対して後者では 11cm である。蓋受けの高さは(1)・(3)がやや高く内傾度も少いようである。これらは中尾谷窯跡群の須恵器と同じ時期に相当するとみてよく、他の二つはやや下降すると思われる。

坏の蓋（7・15・16）

(7) は摘みを欠いているが、内側のかえりが口縁部より内に入る特徴は塚ノ谷第1・2号窯跡の出土資料に相当するもので須恵器第ⅥA期に属する。



第 24 図　　平原（弘法谷）・日当山古墳群出土須恵器実測図 (1)



第 25 図　　平原（弘法谷）・日当山古墳群出土須恵器実測図 (2)

(15)は蓋に頂部を押さえた宝珠撮みとかえりを有するもので、塚ノ谷第４号窯の出土資料に類似するが内側のかえりが若干退化する傾向にあると思われる。(16)はやや小形であるが口唇内側には古式の特徴を具えている。肩部の沈線はすでに簡略化されてしまっている。

高　坏（５）

脚のみで透孔は有しない。脚端でハネ上る特徴をもつ。

高坏の蓋（６）

須恵器第ⅢA期に相当するものとみられる。肩部の区画は浅い沈線で表現されるが口唇部には古式の特徴をもっている。

瓶（９）

口径約 11cm 高さ 12cm あり、胴部が扁平な球形とはならずに底部に向ってややとがり気味で、口頸部の形態も力強い。口唇部内側には段を有するつくりとなっているが、頸部の波状文は省略され

ている。胴部下半には叩きの痕跡が残っている。焼成は堅緻で部分的に自然釉を被っている。

坩（8・10・11・18)

大小、各種出土している。細部の形態に若干の違いが認められる。口唇の特徴からみると(8)が最も古い時期に位置するとみられるが、時期的な差はそれほど大きくないと思われる。(11)以外のものは本来蓋を伴うものであろう。

脚付坩（4）

立山古墳出土資料よりもさらに口頸、脚部が広がる傾向が認められるがこれは須恵器である。

提　瓶（12・14)

(12)は高さ 25cm のやや大型の提瓶である。口縁部にはしっかりした凸帯がついており、側面が扁平となる兆がみえはじめている。須恵器第ⅢA期に属するものであろう。(14)は報告Ⅰに掲載した立山古墳の資料と酷似するもので、体部から頸部への変換する位置にめぐらした楕円形の刺突文の手法まで同様である。この種の小形提瓶はこの地方を中心として須恵第Ⅲ期以後にみられるもので祭祀的色彩の強いものとみられる。

以上1～13は八女市星崎中学校蔵、14～19は、八女市忠見小学校蔵

20は北山・稲荷山古墳出土の陶で岩崎光氏蔵

21は筑後市・一条西原出土の脚付壺、福岡教育大学蔵

（小田富士雄・真野　和夫）

註(1)　小田富士雄「磐井の反乱」（古代の日本3・九州）昭和45年

(2)　福岡県史蹟名勝天然紀念物調査報告書第1輯　大正14年

(3)　小林行雄編「装飾古墳」昭和39年

付1 三助山西地区遺跡の調査

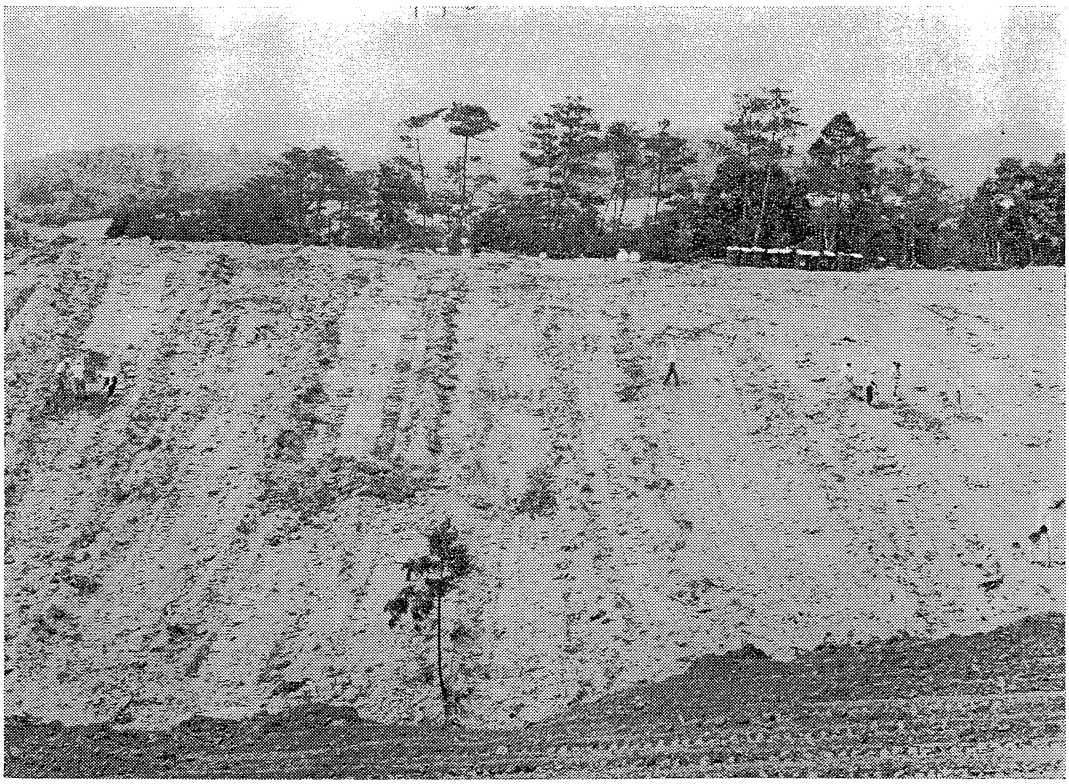
(1) 遺跡の調査

調査報告Ⅰに登載した三助山窯跡群の西方丘陵の整地工事中に踏査したところ、南むき斜面の東西二ヶ所に炭や焼け固まった窯壁様の部分があらわれた。両者の東西間隔は 24m で、 ゆるやかな傾斜地である。ブルドーザーで表土を除去すると、黄灰色粘土の土層が全面にあらわれて中尾谷窯跡群付近と同様な土質構成がみられる。

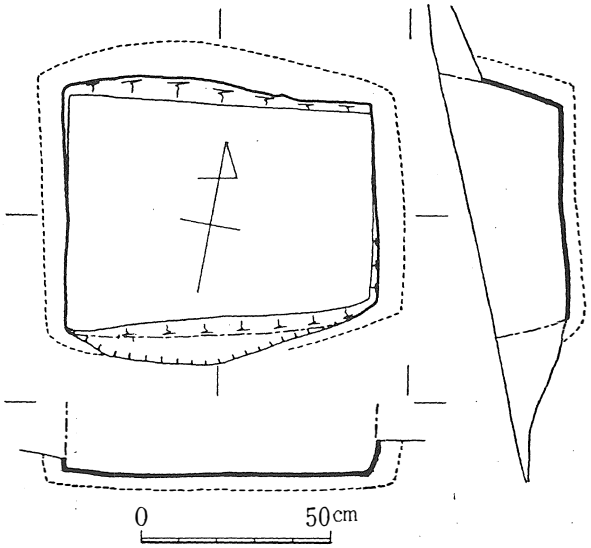
東側の遺構は 70×50cm の範囲にわたって炭の堆積があり、深さ 10～15cm でなくなり、全体が皿状に凹んでいた。遺物はなにもなく、壁面も特に焼き固まったような状態でもない。近代の一時的な焚火のあとかと思われる。

西側の遺構は東西 80cm、南北 70cm の方形炉となり、炉底は水平である。炉壁は固く焼きしまって窯壁のような状態を呈しており、余熱は周囲 5～6 糎の厚さに及んでいて、かなり頻繁に使用したことを物語っている。炉内には土器片が一杯につまっており、廃棄時の処置かと思われる。

炉跡の南方にあたる斜面低部には、ブルドーザーの整地にともなって表土下部に須恵器片が発見された。しかし炭灰やなんらかの遺構のようなものは確認できず、おそらく上方より転落したものであろう。



第 26 図　三助山西地区遺跡調査風景(南より)



第 27 図　三助山西地区炉跡実測図

炉跡を中心とするあたりには特別な遺構の発見もなく、解釈に苦しむが、住居跡のような生活遺跡を考えるのが妥当ではあるまいか。

（小田富士雄）

（2）遺　　物

A.　炉内出土遺物（第28図１～11）

炉内より出土した遺物は、坏、盤、高坏ですべて土師器であった。

坏（１～４）

いづれも破片であるが赤褐色を呈し(4)を除き堅い焼成でよく篦磨きされている。(4)は同じく赤褐色を呈するが焼成は柔らかい。

坏　蓋（８）

小破片で口縁端近くに稜をつくり、口縁はやや内傾する。黄褐色を呈し焼成は堅い。

盤（５～７）

(5)、(6)は口縁部の破片であるが淡黄色でよく磨研されている。底部からの立上りは急である。(7)は赤褐色を呈し焼成は堅い。付高台を有する盤であるが高台は取れている。底部中央には径約2.5cmの凸起があり付高台との間に同心円の沈線がある。

高　坏（９～11）

脚部のみで坏部を欠ぐ。赤褐色でよく篦磨きされた堅い焼成で丈は低い。(9)の脚の中央部には段がみられる。

B.　炉跡南方出土遺物（第28図12～21）

炉跡の南方の丘の斜面で出土及び採集した遺物で器形は坏、坏蓋、椀、鉢、甕ですべて須恵器であ

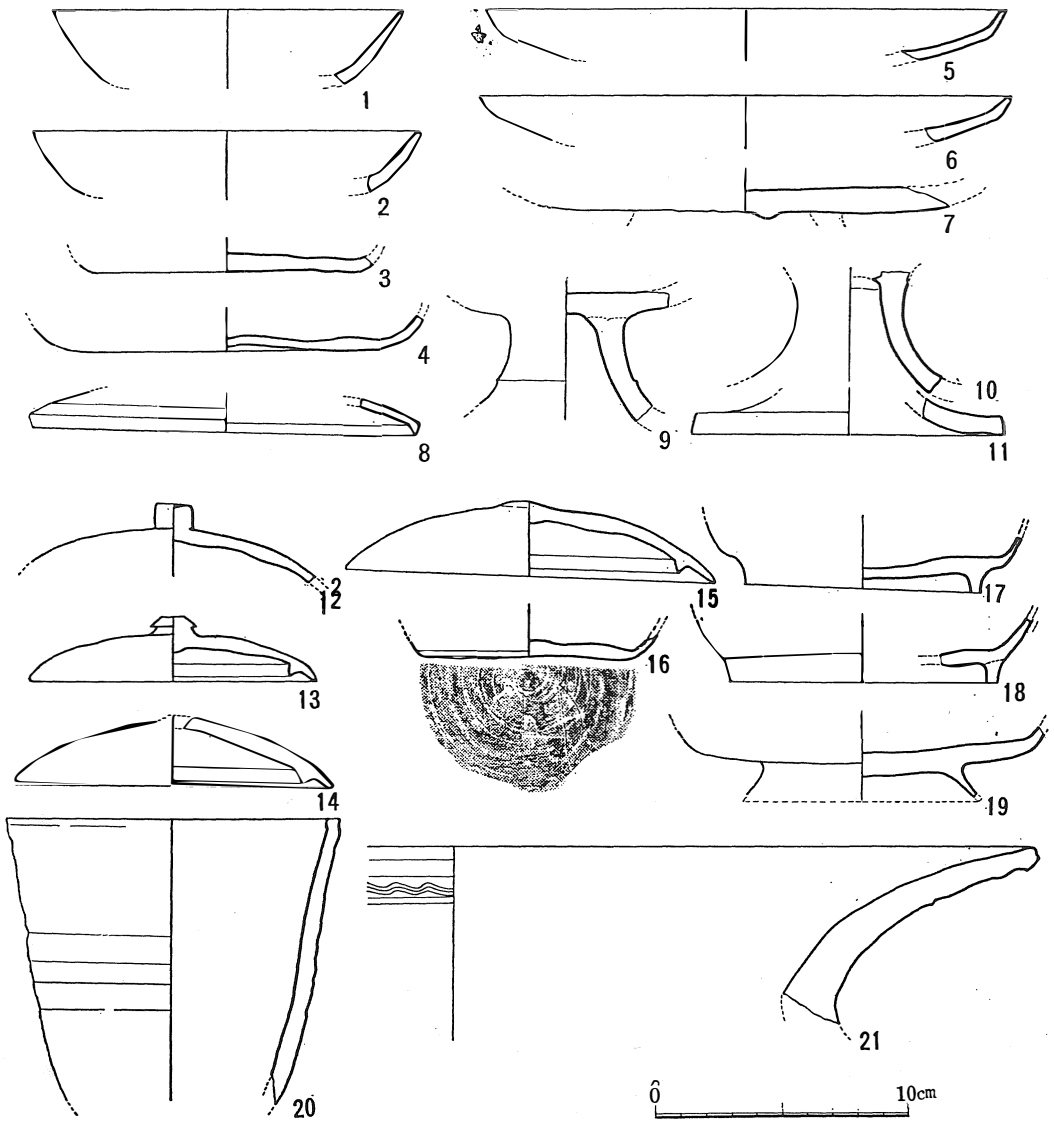
った。

坏 (16)

底部のみの破片で胴部へ移行する個所に明瞭な段を有し、底部にはヘラ記号がある。

坏　蓋 (12～15)

蓋の頂部につまみを有するものと無いものの二種類がある。つまみは円筒状で中央をくぼませたもの(12)と、円錐台状のものとがある。 (13)は直径 12cm、(15) はつまみの無いものであるが、頂部がわずか隆起している。 直径 14.8cm で青灰色の柔い焼成、完形品である。口縁部近くの内面に身受けのかえりをもつ、かえりの先端は口縁端より下に出ない。



第 28 図　　三助山遺跡炉内（1～11）及び炉南方（12～21）出土遺物実測図

椀 (17～19)

底部のみの破片である。付高台の断面が垂直で脚端の水平なものと、高台が外方に大きく広がり安定感を有するものとがある。

鉢 (20)

口径 13.3cm で底部を欠ぐ。胴部中央に4条の浅い沈線をめぐらす。青灰色で焼成は柔かい。

甕 (21)

口径 46cm を測る大形の甕で口頸部は強く外反し、口縁端面には沈線をめぐらし、口縁下には凸帯と沈線を付しその間に櫛描き波状文を施している。

三助山炉跡内より出土の土師器は、その器形よりして奈良時代に属し、炉跡南方の斜面の遺物中で椀は須恵器編年のⅦ期に、その他のものはⅥ期にあたる。

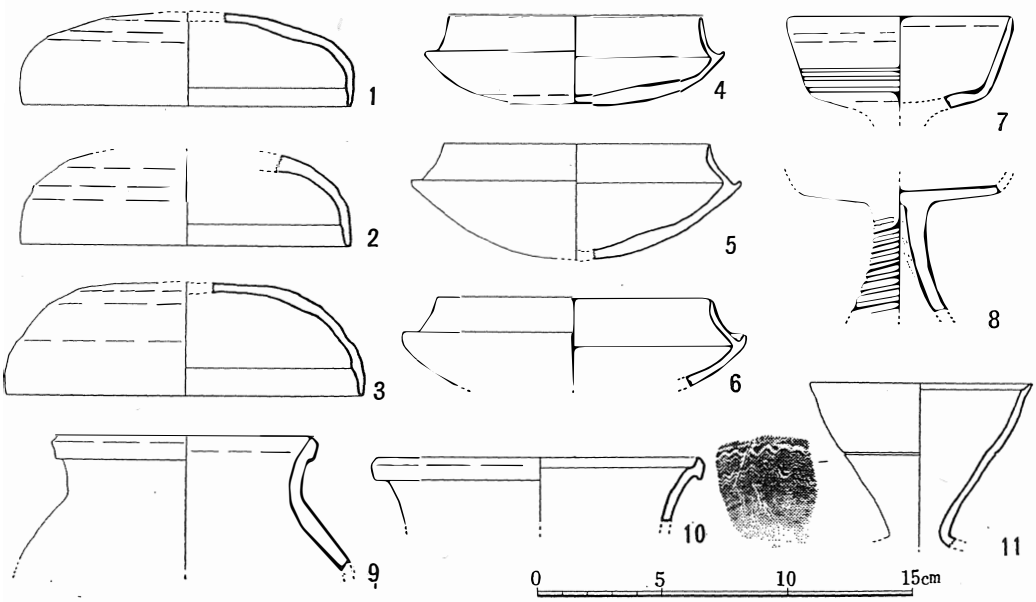
(黒野　肇)

付2　塚ノ谷第3号窯遺物補遺　(第29図)

塚ノ谷第3号窯跡は、第4号窯跡の南約80mに位置する半地下式と思われる登窯であるが、現在では林道の開鑿工事によってその大部分が破壊されてわずかに煙出し部分を崖面に残すのみとなっている。窯の主軸線延長上にあたる清尾池の崖面には池の水を落とす時期になると灰原の一部が露出するという話であったが、前回調査当時は満水の状態で大甕の口縁部1点を採集したにとどまった。今回若干の遺物を採集する機会を得たのでここに紹介することとする。

坏の蓋 (1～3)

口径 13～4cm 高さ約 4cm 前後あり、天井部から体部へはなだらかに連なっており、中尾谷窯跡



第 29 図　　塚ノ谷第3号窯灰原出土須恵器実測図

群の坏の蓋にみられたように段がついたり、明瞭な沈線となって区画する意識はなくなる。口唇部においても内側約 1cm ほどの高さのところに鈍い段を有するが、これは所謂古式須恵器の坏の蓋にみられるものとは相違するもので、塚ノ谷第4号窯でも口唇部の1形態としてとりあげられている。

坏の身（4～6）

最大径 12～14cm、高さは 4cm 前後である。蓋受けの高さは高い（1.5cm）がやや内傾する傾向にある。底部はヘラによる削り仕上げのものがほとんどであるが、入念になされたカキメ整形の回転条痕を残したものが1例ある。

高　坏（7・8）

坏部口径 9cm を測る小形の高坏である。この種の高坏の塚ノ谷第4号窯出土例によると高さは約 9cm で規格化されている。坏部に沈線を施すほか脚部にも通常2条の沈線をめぐらすのであるが、(8)では螺旋状にめぐっている。口唇部内側には鋭いものではないが段がつくられて、次の小形の瓶の口唇部と同様の手法をみせている。脚部内面にはしぼりの痕跡が強く残る。

瓶（11）

口径 9cm の小形の瓶で、頸部中央にある浅い沈線によって上下に区画し下段に波状文を配して装飾している。口唇部内側には段をつくり古式の特徴をわずかに残している。塚ノ谷第4号窯出土の小形瓶と口径、高さともほとんど差異はないが、4号窯出土例では、2組の沈線によって口頸部を三区に分け上・中段に波状文を施している。

壺（9・10）

口径 10～12cm で緩く外彎する口頸部をもつ。口縁部には凸帯がつくられるが、口唇上面は鈍い稜をなすもので、平坦面をもつ手法は行なわれていない。これは塚ノ谷第4号窯跡でも同様であった。

以上の採集遺物の結果からみて、前回調査報告Ⅰで推察したように塚ノ谷第3号窯は塚ノ谷第4号窯における製品ときわめて類似した須恵器の形式をその遺物の構成にもっている。とくに小形高坏・小形瓶は筑後地方の須恵器第Ⅲ期後半の時期の須恵器の小形化を特徴的に物語るものである。

（真野　和夫）

編　集　後　記

八女古窯跡群調査報告の続篇を公刊するはこびとなって調査者一同安堵したところである。塚ノ谷窯跡群の報告を刊行して約1年を経過したが、幸い各方面の好評を得ているようで、さらにひきつづいて続篇を作成することができた。今回は前回よりさらに一時期さかのぼりうる須恵器窯跡群を調査する機会に恵まれたのであるが、丁度九州大学は過激派学生達によって学内封鎖が行なわれていて緊迫した情勢下にあり、考古学研究室の学生諸君は原則として研究室が主催する調査には参加しないという申しあわせを行ったので研究室学生の参加は期待できないことになった。したがって市教委側と話しあった結果、個人的に研究者として調査を依頼されたという名目のもとに自発的参加を要請して調査を行なうこととなった。調査員の不足という事態のもとで発足した調査であったが、また農繁期と重なったために人夫が不足し、実際にあたっては発掘作業をも調査員が当らねばならない状況となった。しかし、市教委関係者の方々の援助と、調査員の共力で予定どおりの日程で調査を完了できたのは幸いであった。八女古窯跡群の究明というテーマの下に一致してこの難局を乗り切ることができたと信じている。

次回には窯跡群の新しい調査と共に、併行してすすめている八女古墳群の調査成果をも収録する予定である。なお前回塚ノ谷窯跡群調査の際に採取された熱残溜磁気による窯跡の年代測定の結果は、渡辺直経氏の報告が本書刊行までに到着しなかったので、次回にまたざるをえなかった。

(1970. 3　小田富士雄)

訂　　正

前回調査報告Ⅰのなかで次の箇所を訂正いたします。

10頁第4図スケールの「10M」を「4*m*」に訂正する。

中尾谷窯跡群

—八女古窯跡群調査報告Ⅱ—

昭和45年3月31日発行

発行　八女市教育委員会
福岡県八女市大字本町586番地
印刷　福岡印刷株式会社
福岡市舞鶴1丁目2の5

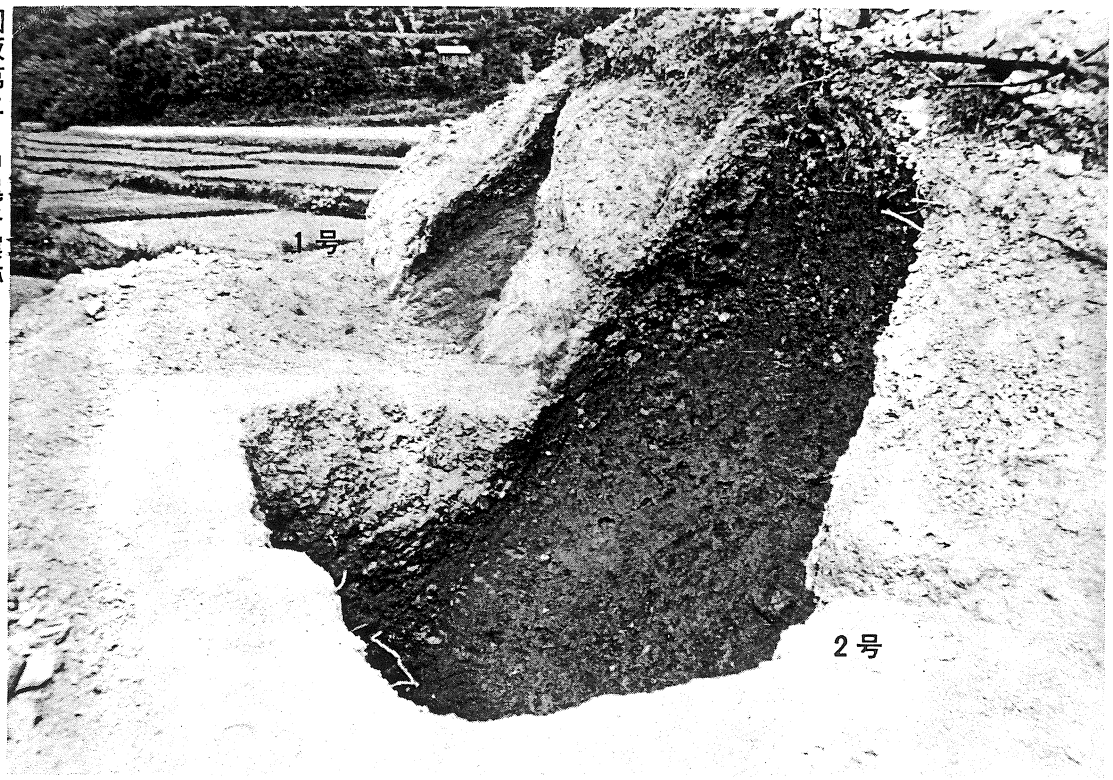
図　　版

図版第一　中尾谷窯跡群　遠景

遺跡遠景　（西より望む）

遺跡近景　（南より望む）

図版第二　中尾谷窯跡　第1号、第2号窯跡

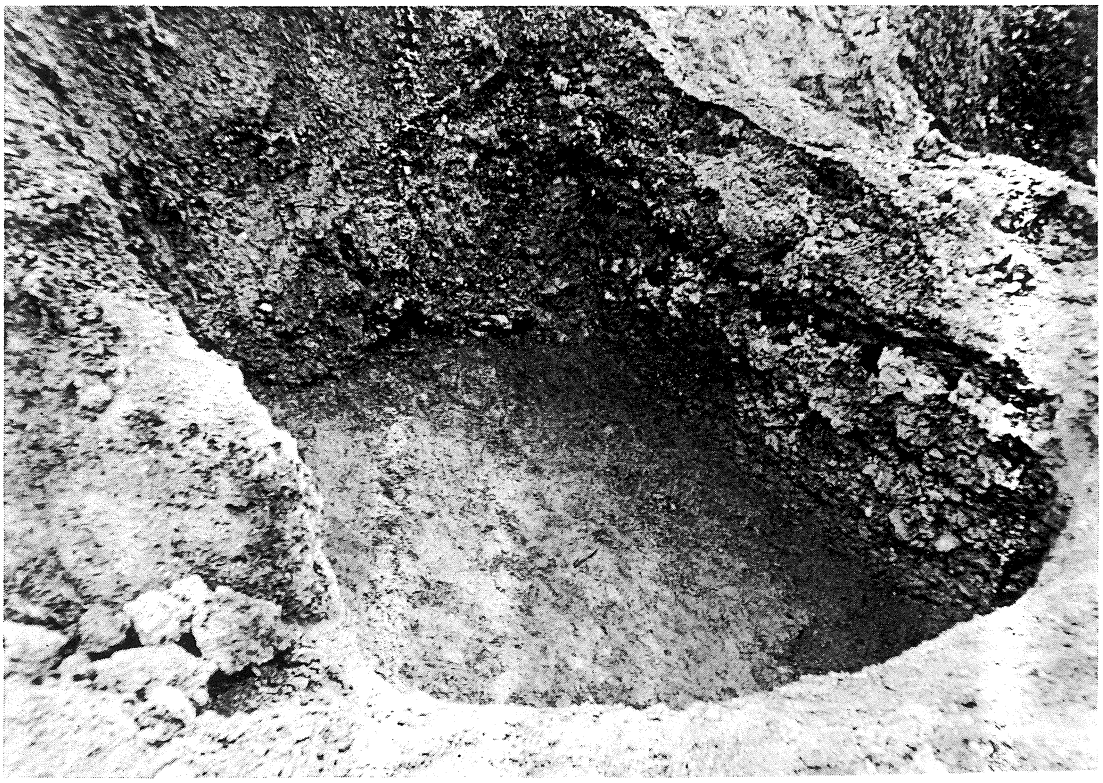


二段目

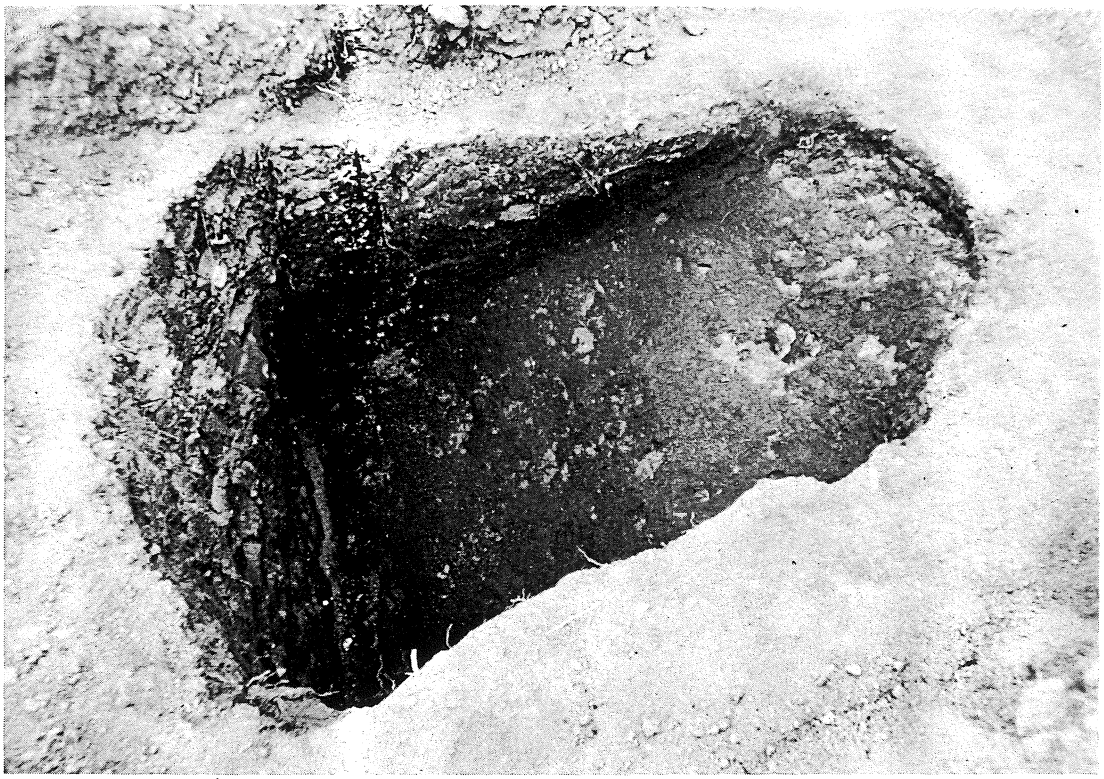
一段目

図版第三　中尾谷第1号窯跡

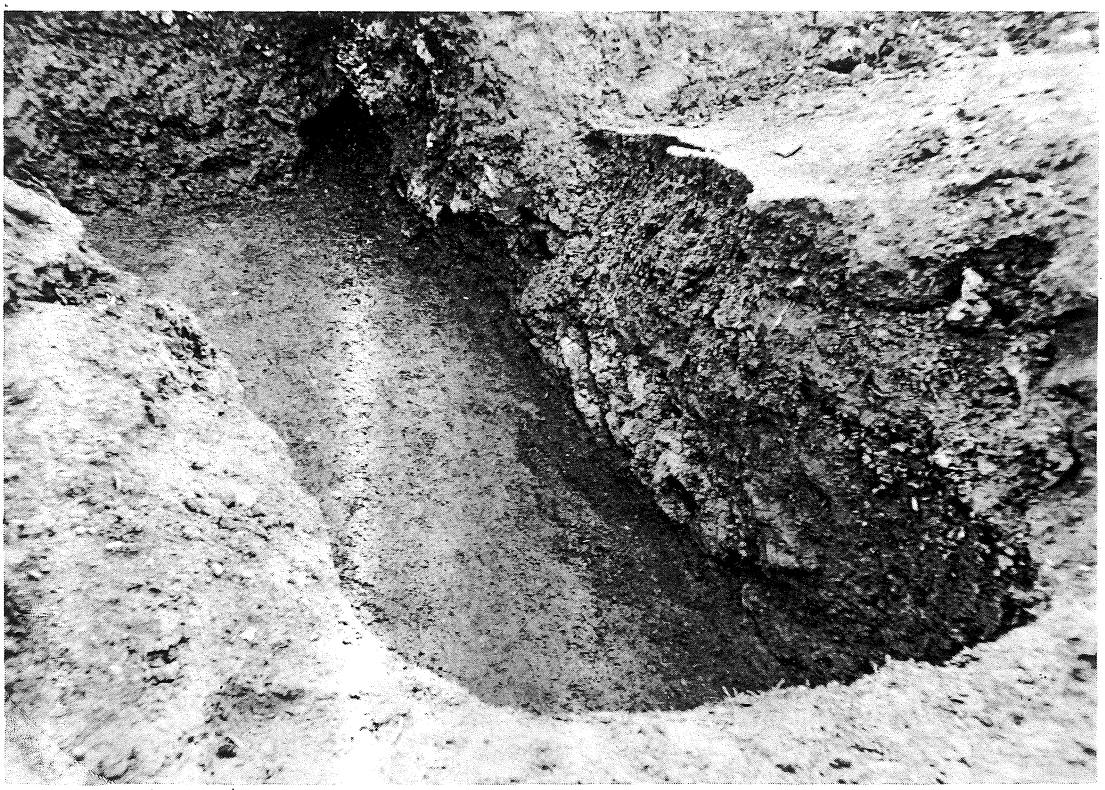
上・二段目（焼成部―煙出し）
下・一段目（焼成部）



図版第四　中尾谷第2号窯跡



三段目（煙出し）



一段目（燃焼部）

図版第五　中尾谷第3号窯跡　全景（煙出しより焚口を望む）